
ナナシとマイナと落日の鎌 【企画競作スレ】

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナナシとマイナと落日の鎌 【企画競作スレ】

【Zコード】

Z9363X

【作者名】

まめ太

【あらすじ】

『お前が嫌いなんじゃー！とばかりに神様に異世界へ吹っ飛ばされた主人公、マイナーな名無し……七志。それでもお情けでたつた一つだけ、本人も気付いていないチートな能力を貰っていた。』

今度のお題は「ゴブリンに追われる」。

企画競作スレではいつでも作者さんを歓待いたします。
鞭と飴持つて待ってるよー。

神に蹴られた主人公

神様に吹っ飛ばされて異世界へ突入した主人公の名は、舞名。
舞名七志。

その名が氣に食わんと神様に蹴散らかされた男。十七歳、受験を控えた高校生。

「理不尽だーー！」と叫んだ彼の声は誰にも届くことなく夜空の向こうで星になつた。

「ここは何処だ。」

まず彼が発した言葉は、あまりにも状況にマッチしなすぎた。
こぞつぱりとした木々が見渡す限りに続いていて、どう考えを捻つても森の中としか結論は出ない。季節的には秋なのだろうか、木々の半分は丸ハゲで残る半分はかるうじて赤や黄色の葉がところどころにしがみついている。そのうち丸ハゲになるんだろうな、と思いつつ地面に積もつた枯葉の上でじつとしていた。

ヘタに動くと迷子になる、とかいう話をどこかで聞いた気がしたので動かないだけだが。

気がついたら立つていただけだ、茂みになつたこの場所に、音もなく。

目の前には灰色と緑色を混ぜたような微妙な色の肌をした小人っぽい何かが居る。

小人といって、背丈は七志の半分程度はゆうにありそうだったが、そして頭の形がへんだ。後頭部が異常にでっぱつていて、それに対して体は細くてガリガリ。

なんとも不格好な人間。いや、生き物。いや、やっぱり人間かも知れない。

なんだろう、アレ。なんて呑気に目を細めて眺めていた。

七志は少々目が悪いのだ。

ソレは一匹だけでなにやらひそかにと動いている。立つたりしゃがんだり、しゃがんだ時には何かの作業をしていくような、そんな風な動きをしていた。

背中を向けているためか、七志には気が付いていないようだ。なにげなしに、七志は近くへ寄りしつとして一歩足を踏み出した。

ガサツ

当然だが、派手に枯葉を踏む音が響いた。

「うわ、」

「ゴブツ！」

振り向いたその顔を七志はたぶん一生くらいは忘れないだろう。額まで裂けた口にはギザギザの牙が並び、目は白目も黒目もなく真っ赤、そしてなにより、手には血まみれの剣を握っていた。

ついでで視界に入る、たぶんその剣の元々の持ち主。

なんで腹を裂いて中身をぶちまけてあるんだろう、と思つた時は自動で回れ右をして全力疾走に移っていた。

「ギギー！」

なにかデカい声で叫んでいる、と思つ間に灰緑色の化け物は三匹に増えていた。

「うわ、増えた！」

右から回り込んでくる化け物の手には棘だらけの棍棒。

振り上げたトゲ棍棒が、七志めがけて襲いかかってくる。

目を瞑つて軸足を左に進路を修正、よろめきながらもなんとか避わした。

七志を追う化け物は三方から、彼を追い立てる。化け物の居ない方向を選んで走ることは、ある意味で彼らに誘導されているようなものだ。より障害物の少ない場所へ、より狩りやすい場所へ。

七志に勝算があるとしたら、少しばかりこの化け物たちよりも足

が速いことだけだ。

普段ならとうにへたばつてしまつていて。命が掛かっていれば、人間はこんなにも粘り強く、我慢強くなる。

過度のオーバーワークで心臓は張り裂けそうな痛みを訴えている。それでも走り続けていた。

手について方向転換に利用した立木の幹に、さきほどどの剣が唸りをあげて突き立つ。

「ひいっ！」

飛び散った血が七志の頬にべしゃりとかかった。

余裕もない中で無理に振り返ると、三匹の化け物がなにやら喚きながらピヨンピヨンと飛び跳ねている姿が遠くに見えた。追いかけのを諦めたらしい、そつは思つたが、ふらつく足はまだ歩みを止めようとはしてくれなかつた。

勝手に走り続けている。いや、もう走ることとは出来ずに歩いている。

「あれって……まさか、ゴブリンとかいつモンスターか？」

苦しい息のまま、歩みも止めないままで、七志が呟いた。肩で息をして、喉は貼り付いたような渴きを訴えている。唾液は出てこない。喉が乾きすぎると、痛いのだと知つた。

とにかく町か村を見つけて……いや、人を見つけて、いや、贅沢は言わない、水が欲しい。

「川、どつかに川くらいあつてくれよお、水、」

泣き事を、半ばヤケクソで呟いただけでも声は喉に絡んで上手く言葉にならなかつた。

ただ単に走つただけでコレでは、この先、どうなるんだろうか、とは考えないようにした。

もつと恐ろしこじと、あのゴブリンが他にもうじゅうじゅう居るか

も知れない、といつ考へは消すことわざ出来ないままだ。

幸運なことに、その後は何者にも出くわさないままで、川のせせらぎを聞きつけた。

「やつた、川だ、下流へ行けば森を出られるはず！」

その頃には、さすがに喉の渴きも緊急を要するほどではなく、思考にも余裕が出来ていた。

川があれば下流には平野がある、平野というのは大抵が田んぼや畑になつて、人の住む集落が出来ているものだ、七志の知る常識で言えば。

軽い傾斜は、すぐに険しい岩肌になり、そこが谷間に流れの渓流だという事を教えた。

そしてなにより、今まで続いた幸運がここでも止きたことも教えてくれた。

「……なんだよ、アイツ等。」

自分の声だというのに、絶望的な響きに聞こえた。

灰緑色の肌、不格好なハゲ頭。真つ赤な目と裂けた口。

けれど、大きさが違う。谷を見下ろすここから見ても解かる、巨体。

血まみれになつた人間の死体を見下ろしている。
さつきと同じくらいの奴を一匹従えていた。

見つからないように身を隠し、チラチラと様子を伺う。
たぶん、ホブゴブリンとかいう奴だ、ゴブリンの上位モンスターでゲームではお馴染みの奴。

序盤あたりに出てきて、すぐに経験値にもならなくなってしまうような奴。

リアルで出会い「これがこんなにも絶望的だなんて思いもしなかつたが、こうなつたらやる事は一つ。

「雑魚とか呼んで」めんなり、「謝るからさつやと行ひちやつてく
ださいー、」
神頼みしかなかつた。

ゴブリンとラントナー

観察するうちに気づいた事が幾つかある。

ゴブリン達はひどく興奮しているように思えた。

後から2匹増えたが、そいつ等は怪我をしていて七志が見たヤツとは違う。

少なくとも10匹以上は居そうな気配だが、後から来た2匹は別の方向から来た。七志が見た、殺されていた人間にやられた傷ではないという事になる。

あの時の死体にしてもそうだ、思い出せば、村人Aという感じじやなかつた。明らかに武装していたし、少なくとも戦闘態勢を整えてからこの場所へ来ていたように思う。

増えすぎたゴブリン。

それを、人間が殺しに来ているのだとしたら……。

だとしたら、返り討ちにあつてしまつた人間を見たのはこれで二人目だ。

よくよく目を凝らせば、血まみれの死体はこちらもやはり武装していたように見える。

その武器をゴブリンたちは奪い取つて振り回していくようだ。手入れされた武器を持つゴブリンが他にも居る。連中に武器の手入れなんて芸当は出来ないと仮定すれば、あの武器は人間から奪つたものだろう、さつき見たように。

もしかしたら、他にも狩人が居るかも知れない。こんな化け物が居ることを、地元の住民が知らないわけがないから、きっと大勢の人間で一気に攻め込んだに違いない。討伐隊か何かを編成して。光明が見えた。

討伐隊に合流しさえすれば、助かる。

一巨のゴブリンが、鼻をひくひくさせ始めた。

「ゴッ！」

一からを指差した途端、一斉にその場の化け物たちが七志の方を見た。

「やめてっ！」

思わず叫んだ言葉に意味はない。だが、慌てて逃げようとして足を滑らせた。

石場を転げ落ちて、かすり傷のみで済んだのは不幸中の幸い。けれど。

神様はきっと僕をいたぶつていて、視界の端に映るのは駆けてくるゴブリンの群れ。

いつの間にか谷間のゴブリン全てが七志に向かっていた。

ヤケクソでその場にあつた大きな石を両手で持ち上げる。先頭の一匹にめがけ、投げつけた。

「グガ！」

喉元で受け止めながらひっくり返ったそこには、ぐしゃりとう音とともに動かなくなつた。

緑色の液体が岩だらけの川べりに広がる。

他のゴブリンが動きを止めて、潰れたゴブリンを遠巻きに囲む。そういえば、ゴブリンってそんなに頭良くないくつて設定だつて、と思いつながら、七志はその隙に石場を移動した。ゴブリンたちは思つた通り、七志のことを忘れていたようだ。

振り向いて連中を確認する。

勇気ある一匹が近づき、石をどけていた。一瞬確認しただけで、すぐに七志は前を向き必死に岩を這う。走ることは無理だ、巨岩が連なり、走れる場所ではない。

遠方で怒りに満ちた咆哮が幾重に響いた。

あまりにも不利な場所に来てしまった。

向こうはぴょんぴょんと飛び跳ねていて、足場の悪さをものともしない。

「ちらは、走るどころか立って移動することさえままならない。あれほどに空いていた距離がみると縮まつてこく。もちろん、あの巨体も一緒だ。

「ちくしょー！」

きっとあの神様は僕に死ねと言つてゐ、湧き上がる理不尽への怒りで七志が叫んだ。

閃いたのは一瞬のこと。すぐさま水に飛び込む。

この辺りは淵になつていて、渓流は溜まり深い緑色の水を湛えている。

どうせ追つてくるのは解つているが、連中の持つ武器だけは何か出来るはずだと踏んだのだ。きっと、先ほどのように後先も考えずに投げつけてくるはずだと。

けれど、季節は冬に近い晚秋。飛び込んだ水は身を切るように冷たかった。へタをすれば心臓麻痺でお陀仏だ、短絡な思考を今度は瞬時に反省した。

心臓麻痺でポツクリ、は免れたようで七志は潜水状態。

飛び込んだ勢いのまま、水中を進み距離を取る。あまり近すぎると思つた時に痛い。水面に顔を出して振り返ると、化け物たちは果然この様子を見ていたらしく、七志と田があつと一斉に怒り出した。

七志の読みは当たり、ゴブリンたちは水中の的に向かつて、手にした武器を投げ始める。

大きく息を吸う。

『潜水してしまえば、勢いを殺された武器で深手を負わされることなんていー！』

幾つもの凶悪な武器が、血の赤い帯を引きながら水底へと沈んで

いつた。

「ふはつー。」

浮き上がり、確認。ぜんぶ素手になつてゐる。のが再び出でくるのを待つ、とくに程の知恵はない。それはさつき確認済みだ。

次々と水に飛び込んでくるゴブリンたちを見る。

セオリーではこういうモンスターは泳げないものだが、リアルは違うらしい。一匹だけ、例の巨体がどうしようかと迷つてゐる風でおろおろしていたが、小さいのは全部が即追つてきた。

向こう岸へむけて泳ぐ。

幸い、ゴブリンは泳ぎの名手というわけでもないようで、不格好ななりでもたもたと水中を移動している。これならまた少し時間が稼げそうだ。

一匹、渦に巻かれて流されていつた。残るは8匹。

泳ぎきつたところで、手を掴まれた。

心臓が止まるかという衝撃で、顔を上げる。そこに居たのは人間で、今度は急激に力が抜けた。

「なにやつてんの！ 早くあがりなさいよ！」

突然重くなつた腕に驚いたようだ、その子は大声で七志を叱咤した。

ブロンドの髪の女の子。いや、女性。いや、たぶんやっぱり女の子だろう、うん。

緊張感が一気に抜けてしまつて、妙な笑いを貼り付けながら、七志は独りつぶやいていた。

後方で、派手な水音がして振り返る。

あのホブゴブリンが意を決して、飛び込んだようだった。さすがに七志も緊張が戻ってきて、慌てて少女の手を借りて岩を這い上る。

二人になつて余裕が出来たといつもあるだらうか、そのまま逃げだすところを、踏み止まる。

少女の助けを借りたおかげでやりやすくなつた。

ついでなので、そちらにある手ごろな石を持ち上げ、迫る「アブリンヘと投げ落とす。岩を這い上ろうとする所へぶつけるだけながら、簡単すぎるくらいだ。2匹が七志の投げた石と共に水中へ沈んだ。

こんな場所なら鈍器で殴つて氣絶させるだけで勝ちだ。

「やるじゃん。でも深追いは禁物、逃げるわよー。」

「あ、ああ、」

なんだかよく解らないが、この少女についてゆけば本隊に合流出来るのだろう、と七志は思い、後を追つた。

俺、この戦いが終わったら……

「まさかこんなに居るなんて想定外よ、こんな仕事、受けるんじゃなかつたわ！」

背を向けていた一匹を背後から襲い、少女は毒吐いた。ゴブリンの首に短剣を突き入れ、横へ捩じつて引き裂く。声ひとつ上げず、緑の体液をまき散らしながらゴブリンが倒れた。手にあつた剣をもぎ取つて、七志に投げよこす。

「使って。」

あたしはこっちの方が得意だから、と血を振り払つた短剣を見せて笑つた。

「それでも、へンななりしてゐるわねえ？　どこから來たの？」

海の向こう？

「えつと、なんて言つたか……つて、もつ追いついてきた！」

「アイツの相手は無謀だから、今は逃げるわ！』

名前も知らぬ少女の焦燥ぶりに不安がもたげる。

まさか、の念が。

まさか、本隊とか、討伐隊とか、そういうのは……居ない？

胃の底へ冷たいモノが落ちる。いや、まだ解らない、勝手な想像だ、と無理やり振り払つた。

「夜になれば、他の連中は巣へ戻るわ！　アイツ等をえぞうにかすれば……！」

後方には相変わらず数匹のゴブリンが追いすがつてゐる。デカいの姿が見えないが、淵で暴れていますのは吠え声でわかる。

途中移動出来そうな箇所があつたにも関わらず、二人は下流へ向かつて逃げ続けていた。

ゴブリンは夜行性ではないらしい、それで彼女が不利な川べりから移動しない理由が解かつた。この辺り一帯がゴブリン地帯ともい

えるような場所で、他にも沢山の「ゴブリン」が居るのだ。」

ヘタに行動範囲を広げれば、落ち着いてきている他の「ゴブリン」たちをも興奮させてしまうという意味に取った。それは、先ほど振り払つた、討伐隊など居ないといつ仮定での話だが。

詳しい事情を聴くだけの余裕もないのだから、仮定は最悪の方向でいく方がいい。涙が出そうになつた。

夜になつて寝静まつた後で、脱出するつむづなのだ。」「それには最大の難点が残されていたが。

とびきりデカい咆哮。あの巨体が淵から上がり去らず、もがいでいるのだろう。彼女が居なければ、ヘタをすれば自身が同じ巨体にあって、最悪、水中での乱戦を強いられていた。

咄嗟の判断だったが、そう考えればゾッとする。無謀だった。今もそうだ。

岩場で足をとられ、思つようとも移動も出来ない。すぐに追いつかれるだろう。

ぐるり、と反転する。向かってくる「ゴブリン」、その数5匹。

無謀といつながら、あのホブゴブプリンをむざむざとハイツ等と合流させるほどの無為無策はない。

今なら一人だ。少女の方は戦闘に慣れてもらひ。おまけに奴等は素手。

「無茶よー。」

「なんとかなるー。なんとかしないと、それこそ絶対に助からないー！」

七志の意図を読み取り、少女も身構えた。

チャンスなのだ、あの巨体が水中でもがいでいる今、この数分で残りを片付ければ。

一対一！

飛び掛かってくるゴブリンは、一斉に少女をまず狙つた。野生ではそれがセオリーダ。

喉元へ牙を向けた一匹を七志が横殴りに弾き飛ばした。

「さやああ！」

絶叫にも近い。

完全に舐めていた、リアルなゴブリンは素手であろうとその牙がすでに凶悪な武器。

腕に食らいついた者、肩に牙をめり込ませる者、集団での狩りは連中の方が上手だ。

七志には目もくれず、まずはより弱い者を倒しにかかる。先頭の三匹が次々に少女へ殺到した。

七志は少女の手のナイフをもぎ取り、肩に居るゴブリンの眼窩に突き刺した。もう片方の手で自らの剣を思い切り振り上げ、腕を食いちぎるつとするいびつな後ろ頭を半分に。今度、悲鳴を上げたのはゴブリンたちだ。

一瞬遅れて、残りの一匹がやはり少女を狙つ。七志の動きもスムーズだ。

片足は少女の脇腹を食い破ろうと狙つたゴブリンの口に。阻止しただけだ、噛みつかれた牙が靴を通して足に届く。そのまま思い切り蹴り上げて引き剥がした。

最後の一匹は少女の太ももに食らいつき、その肉を食い千切ることに成功していた。

即座に七志が踏み潰して殺す。

どうしてここまで動けるのか、そんな疑問がふと浮かんだものの、構っている余裕はない。少女は大怪我を負ってしまい、早く医者に診せないと命に係わるだろう。

「うう……」

少女に肩を貸し、慌てて逃げる。

見回すと、仕留め損なったと思つた2匹は這いするだけで無力となつてゐるのが知れた。

田にナイフを生やしてのた打ち回る一匹と、蹴りで顎が外れ怯えた田でこちらを見る一匹。

「止血しないと、どこか、隠れる場所は……っ、」

咄嗟の思いつきで行動するわけにはいかない、今度こそ絶体絶命。怒り狂つたホブゴブリンの野太い叫びが響く。

小さな洞窟、いや、岩場の中で自然に出来上がつた田端と田端の隙間。

そこへ滑り込んだ。

奥行きがある事を願つて。

「ちくしょう！　またやつた！　またしても、やつちまつた！…

絶望的な状況だ、奥行きはほとんどなかつた。

奴が腕を伸ばせば届くだろう、そして捕まえられて引きずり出されれる。

それほどの距離しかなかつた。

少女の息も上がつてゐる、止血をする暇がないのだ、ホブゴブリンはもう追いついている。

少女を奥へ押し込み、七志は密着する形で出来るだけ身体を天井に貼り付かせる。

胸に剣を構え、その時を待つた。

太い腕がなんの躊躇もなく伸ばされ、洞窟に侵入する。

少女に届く前に剣を叩きつけた。

「ゴアア！！」

鮮血をまき散らしながら、腕が引っ込む。

この最後の武器だけは持つていかれるわけにはいかない、もう選択肢を間違えるわけにはいかない。

叩きつけるのみ。決して突き刺してはいけない。

再び、逆の腕が伸びた。もう一度剣を叩きつけて追い返す。

洞窟の向こうでホブゴブリンが転げまわり、暴れているのが見えた。

それでも怒り狂った化け物は、一人を諦める気にはなっていない。今度は、顔を直接洞窟に向け、中を覗き込んで咆哮した。

野太い声。すでに周囲は暗く、夜の時刻に入っているだろうに、この附近一帯にも届きそうな、馬鹿でかい声だ。

獣が騒ぎ始めた。

夜に入ったことで、余計にこの咆哮が遠慮なく静かな空気を搔き回している。

「……まずいわ、他のゴブリンが気づく……」

胸をかすめた不安を、確定にされた。だが、打つ手は何もない。腕を伸ばしてくる度に叩いて戻す。顔を出すか、腕を突っ込むか、ホブゴブリンはそれ以外のことは考え付かないようだつた。

顔か、腕か。

三度目の閃きが、七志の脳裏によぎつた。

「いちかばちかだ、」

「え？」

顔か、腕か。

洞窟に籠城してから初めて、七志は構えを変えた。

身を低く、右肩を前へ、剣の柄元は肩、肩甲骨の窪みへ固定し、力の分散を防ぐ。

左手で柄をしっかりと掴み、右手は刀身を直接掴んだ。

少女が見たこともない構え。

当たり前だ、剣術など知らない七志のオリジナル。即興で作り上げたもの、必要にかられて。

『大博打の型』とでも呼ぶのが相応しい。

確率、2分の1。

洞窟の入り口に影が差す。
顔か、腕か。

「ゴアアアー！！」

咆哮を聞くのを待つてはいない、タイミングを読んで、化け物が動いた瞬間に仕掛けていた。

捨て身の突進。

出でてきたのは、顔！

「もらつたあ！！！」

灰緑色の肌、真っ赤な両耳のど真ん中、眉間の位置に狙いを定めて。

渾身のタックルをかけた。

切つ先が瞬間、抵抗したかに思えたがすんなりと骨を貫き、その柔らかい脳髄にまで届き、そして後頭部の頭蓋を破つた。

どすん、という手応え。

断末魔と共に、巨体は思い切り伸び上がり、七志を引きずり出した。

そして、そのまま後ろへ倒れ込んだ。地響きを上げて。

「なんばんわ、さみうなり。

「や、やつた……、」

顔、だつた。

これが腕ならば、大した怪我も負わせられず、最悪、敵の警戒を呼び起こして反撃不能に陥るところだつた。なにより時間がないのだ。

少女は息も絶え絶えとなり、喘いでいる。

「大丈夫か?」

心配する七志の方へと視線を送り返すだけで精一杯という状況は危機的なものに見えた。

「どうも、ここまでっぽい……かな、」

無理に作った笑みが痛々しい。嫌な気配に七志は為す術もなく狼狽えているだけだ。

確かにこのままではあと何分も保たないかも知れないと思えた。

「町まではどのくらいある? 僕が負ぶつていいくから、」

「無理、……夜明けまで、かかるわ、」

聞かされた即答は、僅かな期待を打ち碎く。

「いい? この川を下つていけば、町があるから……。町に行つたら、ギルドを訪ねて。

『リリイたちは失敗した』と、伝えてちょうだい……。お願ひ。

青褪めた少女の顔、唇は色を無くし、死が彼女の傍に佇んでいる氣配がした。

「死の気配は魔物を呼ぶわ、早く行つて。

あたしを連れてくなんて無茶、言わないで。」

よく解らないが、なにか無理難題を言つたのか。少女は目に涙を浮かべて、七志の肩を押しやろうとする。自分を置いて早く行け、

と。

「この世界は七志が居た世界とは違いますから、何がなんだか解らな
ずやる。

「ハーリンが居て、襲われて、ホバハーリンともなると絶望的だつ
た。

なんとか逃れたと思ったのに。

「なに言つてんだ、せつかく助かつたんじやないか！ 見捨てて行
けるか！」

感情が先にたつて、気付けば怒鳴り返していた。ふと、妙に鼻を
刺激する感覚。

なんだ、この臭い、と七志は振り返る。

暗闇に、大きな獸らしき影が蠢いていた。黒い茂みの中から、そ
れは現われた。谷の岩場を見上げると、そこには薄暗い影となつた
森の木々。

ガサガサと派手な音をまき散らし、何の警戒も躊躇もないまま、
獸は川べりへと降りてくる。

「なんだ、あれ？」

「……うそ、あんなのが居るなんて……」

少女の声が震えている。彼女の名前だらうか、リリィといつのは。

それどころじゃない、と思考を切り替える。

目を凝らす。

月明かりの下に、獸は姿を現した。

一つ目の、毛むくじらの、四足の動物。

一見ではなんとも形容がし難い。体は水牛、首はラクダ、そんな
感じ。

「カトブレバス、」

「え？」

思わず聞き返していたが、その名を七志は知っていた。

ほとんどファンタジーなどに興味はないが、昔やった事のあるゲームの、強敵の名がそれだつた。
確か、石化の魔法を使つたはず。

「逃げて！ あれはゴブリンなんかとは全然違うわ！ 敵いつこない！」

もし、七志に能力があるとしたら、それはこの閃きかも知れない。

ピンと来る感覚。

もともと七志が持つていたのか、あの時、神がせめての情けで与えてくれたのかは解らないが。

「石化は解けるものか？」

「え？ なに、言つて、」

「ヤツの石化能力はどんな感じだ？ 石化した人間を元に戻せるか？ 一部だけを石に出来たりは！？」

一気に捲し立てるど、少女は目を見開き、瞼をぱちぱちとしばたかせた。

何をしようと思つているのかは、即座に理解して、叫ぶ。

「無茶よ！ そりや、戻す方法はあるけど、その前に全滅がオチでしょー？」

「やつてみなきゃ解らない！ やつをだつて無茶だつて言つた！ けど、成功しただろ！…」

「ゴブリンと比べるべくもない事は百も承知だ。」

けれど、やりもしないで諦める気にはどうていなれなかつた。

七志は自分の服の両袖を引きちぎり、細かく裂いて応急の包帯を作り出した。飛ばされた時に学校の制服だったのが幸いした。学生服の下に着ていたカツターシャツは素手でも裂きやすい生地だ。場所が場所だけに完全に止血出来るわけもなかつたが、少女の足の付け根あたりを固く縛る事でさつきよりは随分と顔色もマシにな

つた。色々な雑学を脳みそに詰め込んでいた事に感謝する。応急処置の方法に何の关心も持つていなかつたら、大腿骨の下を縛る意味さえ知らなかつただろう。

小説家になりたい、と、色々な事柄をネタとして蓄えていなければ、こんな芸当は出来なかつた。

どくどくと流れていた血が止まる。

「君だつて、ここで死にたいわけじゃないだろ、本当は生きて帰りたいんだる。」

本当にリリイといふ名だらうか、少女が言葉を詰まらせる。

「……目から光線を出してくるわ、

掠つただけでその部分が石になつてしまひなんてのは、ヤツを語る上では常套句よ。」

「遮るものさえあれば、その足の怪我だけを石化させる事が可能つてわけだ。

大丈夫、俺たちは上手くやれる！」

リリイは目を伏せた。とても楽観的になれるような状況ではない、とこう意味だ。

それでも七志は余裕を見せて笑う。

たとえ、その笑みを少女が見ていなくとも、自分自身への暗示を含めて、そうしなければいけない理由があつた。

やりもしないで逃げる、かつてはそれが当たり前だつた自分を振り返り、苦笑して。

「逃げるなんて選択肢は、この世界にはなさそだもんな。」

少なくとも、逃げても当面は問題がないといふ状況ばかりではなさそうだ。

「こんな場面では誰もが躊躇なく逃げるわ、あんたが馬鹿なだけよ。

リリイが半ば呆れた様子で訂正してきた。

「そうかな。」

「そうよ。」

心はいやに落ち着いている。諦めの境地という奴かも知れないな、と七志は思い、目前に迫る新たな脅威に向かって、新たな対処法を思案していた。

かつての自分、元居た世界で安穏と怠惰に日々を過ごし、不平不満だけは一人前に、運の無さだけを嘆いていた自身を思い出す。あの時の自分は、確かにあの世界を疎んじていた。

「こんなのは、本当の俺じゃないんだ、か……。」

急に呴かれた言葉の意味を理解せず、隣の少女は首をかしげる。それきり黙つた七志はそのままに、作業に戻つた。砥石を掛ける音が低く洞窟内に響く。

例の獣は、すぐ外で、さきほど七志が倒したホブゴブリンを食い漁つていた。

大した努力も必要とせず、適当に力を抜いて過ぎ¹していくても、生きるには不自由のない世界。精一杯に頑張つて何かを成し遂げた事があるかと問われたら、一点の曇りもなく「はい」とは返答出来ない。

死にもの狂いに努力して何かを為した経験などない。

さつきのように、一步間違えば死ぬ選択肢など、選ぶ機会さえなかつた。

そんな環境にはなかつたし、そんな未来を望んだつもりもない、けれど、自分の目一杯の力をすべて注ぎ込んだ経験があるかと聞かれたら、答えに詰まる。

精一杯だつたろうか。

これ以上は無理だと思うほど努力しただろうか。
平和ボケしていたんだ、とつくづく思う。

手には磨き抜かれた一振りの剣。

リリイがポーチに入っていた砥石を使い、徹底的に磨き上げた。

鏡のように、今、剣を構えている七志の顔を映し出す。

「器用なもんね、砥ぎ師なの？」

「包丁以外を砥いだのは初めてだよ。」

刃の部分は砥いでいない。均等に砥ぐ自信がなかつたから、触れ
ないことにした。

用があるのは刃ではなく、刀身の方だ。

鏡のようにも月の明かりを反射させてみた。

激闘！ カトブレパス

「俺にはさすがにこれが限界だ、」

さすがに、鏡のように、とはいかない。

水気が取れると薄く膜を貼つたように細かい研磨傷が顯われ、鏡は曇つた。

心許ない上に、不安がよぎる。だが、これで行くしかないと心を決めた。

リリイには岩の陰にぴたりと身体を這わせ、太もも部分の怪我だけを晒すかたちに手頃な岩を残る足首付近へと配置する。これで、岩が邪魔をして他の部分が石化するのを防いでくれるはずだ。

「俺が奴を誘つて光線を当てるから、その後もここを動かずじつとしててくれ。」

七志がしくじれば、それで一巻のおしまい。無謀とも言える作戦だが、リリイには従う以外に取れる選択肢はなさそうだった。今や、ろくすっぽ動くことさえ出来ないほどに弱っている。

悔しいのだろう、唇を噛み、目元を赤くする。

「大丈夫、まったく手がないわけじゃないんだ。」

奴が、自分の石化光線で自分が石になるつて事を教えてくれた君のお蔭だ、と少女を勇気付ける。

実際、何も知らない七志にとって、その情報は宝石よりも貴重なものだった。

そのお蔭で、この作戦を思いついたようなものだ。

「けど、気をつけて！ 奴は確かに自分の光線で自分が石になるわ、けど、それも5分程度で自力で元に戻すのよ、だから……！」

「大丈夫、その前にトドメを刺せばいいんだろ、」

今一度、鏡を確認し、七志は獣の方へ向き直る。

「こちらには見向きもせず、倒れた死肉をむさぼっている化け物。

化け物が化け物を食っている。

さつき、試しにこの獣の横を抜けて逃げられるかどうかを試した。

答えは、威嚇射撃。

足元を掠めていった虹色の怪光線が、あの化け物は一心不乱に獲物に食いついていると見せて、すでに一人を射程に収めている事を教えた。

あの位置にいる間に、リリイの足に一発命中させなくてはならない。角度が変われば隠れている部分のどこかに当たる可能性がある。一発当てたら、すぐに場所を変えて……あれこれと考えていた時、獣が身を震わせた。

ぶるぶるつ、こういう動きはゲームで要注意なのだ、七志は咄嗟の判断で動いている。

「……」

一つ目が七志を捉える。七志の身体が移動する間に、獣の目が白目を剥き、その眼球の裏側に魔力が虹色の膜を形成した。ほどばしり、撃ち出される、一筋の光。

横つ飛びに光線から逃れた七志が見ていた、それが石化光線の発射されるメカニズムだった。

発射のタイミングさえ解れば、避けることはさほど難しくもなさそうだ。

「なるほどね、光線を発する前に身体を震わせる、と。」

思えば、モンスターたちにはある種の癖のようなものがある。

ゴブリンは後先考えずに手にした武器を投げ捨てるほど低能だつたし、このカトブレバスにしても、厄介な光線を放つ前には威嚇で身を震わせる癖を持つ。

さすがにリアルの怪物はゲームほど単純ではないだろうが、希望を見いだせた気がした。

ぶるぶるとまた水牛のような身体が震えた。すぐにその場所を移

動、さつき七志が居たところを怪光線が通り過ぎていった。

だんだんと身震いから光線までの間隔が短くなっている。少しばかりの焦りを感じつつ、七志は誘うように洞窟の前へ立つた。

「よし、撃つてこいよ、こっちだ。」

七志が身振りを激しくすると、相手の獣も威嚇を激しくするという法則にも気付いた。

間隔が短くなるのは、これは興奮状態の高さかも知れないと思う。もう食いかけの死骸はそっちのけで、カトブレバスは前足で地面をしきりに叩いている。

相當に怒っている様が窺えた。

ぶるぶると身を震わせ、化け物がまた虹色の怪光線を発する。当初の目的を達成した。洞窟へ届いた光線が、赤黒く変色していたリリイの足の怪我を灰色に塗り替えるところを七志ははっきりと認める。

「よしつ！」

上出来だ、あとはコイツの始末だけ。

振り向いた七志は驚愕する、光線を放つだけだった化け物は、敵に向かつて突進してきていた。

重たい衝撃。

「ぐつ……！」

まるでトラックに撥ねられたような、鈍い痛みが腹部に広がった。

「グフウウウ……！」

怒りを露わにしたカトブレバスという化け物は、間近に見ると本気で水牛ほどの巨体を持っていた。

さつき倒したホブゴブリンよりもさらに大きいのかも知れない。

七志の上に覆いかぶさり、まさしく、蹴り殺そうと狙っている。

四足の獣が地を蹴り、全体重を掛けた一本の前足を中空で揃え、

七志の顔面に狙いを付ける。

「くそ……！」

無理やり上体を起こし、毛むくじゃらの胸にしがみついた。ドガツ、振り抜いた両前足が岩を碎く。ラクダの首が居なくなつた七志を探して右往左往した。

「ゴフウウウ！！」

怒りの咆哮が低く響き、ひずめが小石を跳ね上げながら地面を蹴る。

滅茶苦茶に走り、跳ね、怪光線を発する。

水の中へ飛び込んだ。

自分の腹にしがみつく七志に気が付いたのだ、脇腹を剣で刺された。

滅茶苦茶に暴れ、横倒しに水中へ。

「ふはっ！」

もみくちゃにされた七志が、引き剥がされたかたちで勢いよく水中から姿を現わした。

盛大に水を飲み、盛大にむせ返る。

カトブレパスの巨体も勢い通りの水しぶきを撒き、立ち上がる。

ぐるりと白目を剥いた。

魔力の充実は異様なほど速い。眼球が虹色に輝いているように見えた。

射出。

キラリ、と光った、そして跳ね返る虹色の魔力。

一瞬、怪物は誰かの虹色の瞳を間近で見たような気がした。こんな近くにまで寄ってきていた事が信じられなかつた。

洞窟でじつとしてはいられず、リリイは無茶を推して這い出だした。

目にした光景は信じがたいものだ。

水中から七志が飛び出し、すぐ後からカトブレパスの巨体が水飛沫を上げて立ち上がり、躊躇もなく石化光線をまき散らそうとした。その怪物の目の前に、一本の剣が突き出されたのだ。視界をふさぐよつて。

滑り込んだ七志は、怪物の足に踏み潰される覚悟を決めていた。事実、前足の一本は七志の腹のすぐ上でぴたりと動きを止めている。

ぶるぶると震えた後に、息を呑む七志の横へと降りた。よつやく這い出していく。四足をふんばるようにして、怪物は石化した頭部を支えて踏み止まっている。心中で詫びて、七志はその頭に剣を振り下ろす。一つ目の怪物、カトブレパスの頭は粉々に砕けた。

3分間クッキング「まず皮を剥きます」

ぱちぱちぱち、

突然、上空から拍手のような音が降り落ちてきた。

崖の上の黒い森林の陰。日をこらせば、闇に紛れて人影が動いている様子が見える。

「ジャック！ あんた、生きてたの！？」

喜色ばんだりリイの声が後方から聞こえた。

月明かりの下に、姿を現わしたのは瘦せぎすの若い男だ。冒険者というよりは、夜盗か犯罪者のような顔つきをしている。第一印象は、胡散臭い、だつた。

「悪い、悪い、なかなか見事な戦いぶりでな、思わず観戦しちまつてた。」

崖を滑り降りてきた男が、一人に合流するなり、へラへラと笑いながらそう言った。

悪びれてもいない物言いに、七志は少々カチンと来る。「いつから居たのかは知らないけど、助けるつもりもなしに、高見の見物つてわけかよ。」

「そう噛みついて来なさんな。

カトブレバスだぜ、冒険者が100人居たら、100人が全員、お前らを見捨てて逃げてる相手だ。……無茶言つなつて。」

確かにそういう話は戦闘前にリリイからも聞かされている。

言い返す言葉も見つからず、せめてむつとした顔は崩さないままで七志は引き下がった。

「さあさあ、ぐずぐずしてたらまた厄介なモンスターが出張つくるかもしねん。」

「え？ ……ちょ、なにすんだよ、」

ジャックと呼ばれた男は七志の背後へ回ると、その背中をぐいぐいと押しながら川の中にある化け物の死骸へと向かわせる。

「なにして、せっかく大物を倒したんだし、貰うモンは貰つとかなきやだろ?」

「貰うつて?」

七志が本気で何も知らないらしいと気付き、ジャックはリリイを振り返る。苦笑いを返す彼女をみて、「ああ、」と納得した。

「毛皮を剥ぐんだよ、あっちのホブゴブリンはリリイがやつてくれるから、俺たちはちよいと力仕事だ。」

毛皮と聞いて、今度こそ七志は口を開けたままで目を大きく見開いた。

七志を移動させると、男はリリイの元へいったん戻り、何か手渡してから再び川へ戻る。

「お嬢には薬草を噛ませといったから、しばらくは平氣だ。」

濃い緑の草を一束、それを七志に見せながら男が効能を説明してくれた。どこにでも生えている珍しくもない草だそうだが、鎮痛作用と僅かだが気力の回復もしてくれるという。

忘れないように、その草の形状を必死に覚え込む。食い入るようを見る七志に、ジャックは笑いながら薬草の束を握らせてポケットに捨じ込ませた。

「やるよ、本物と見比べた方が解りやすいだろ? これも小銭にはなるから、覚えとくといいや。」

気力が回復すりや、体力も少しは戻る。ヒーラーが居れば手つ取り早いんだが、早々に殺られちまつたんでな。治療は無理だ。だが、街までは余裕だよ、これ以上化け物に襲われない限りはな。」

男の言葉を聞き、七志もほっと息を吐く。

その肩を叩いて、ジャックは七志を仕事へと促した。

水の流れに横たわるカトブレバスの死骸。

「仕事をしたんなら、証拠を持って帰らなきゃ報酬は貰えない。」

「正直、今回はキツ過ぎて証拠を取る間なんかありやしなかったからな、あんた等に合流出来てラッキーだったよ、俺は。」

今回はゴブリン退治の依頼だったこと、倒したゴブリンの耳を削いでおき、憲兵の前で山と積み上げて見せることで報酬を貰う予定だつたことなどを聞かせてくれた。

「残念ながら途中で散り散りになつてな、三人の死体は向こうでみた。生き残りは俺とリリイだけのようだ。あんたは迷子にでもなつてたのか？ 見たこともない衣装だが？」

七志は説明する、異世界から飛ばされて來たのだと。

正直、信じてもらえるとは思わなかつた。異世界のなんのと書いて、通じるとは思えなかつたのだが。

ジャックは一瞬、怪訝そうな顔をただけで、七志の言葉をあつさつと信じてくれた。

「こんなに簡単に信用してもらえるとは思わなかつたな……、」

「まあ、前例がないわけじゃないんでな。ていうか、割とポピュラーに見かけるんだよ、スリップしてきたつて奴等はな。」

大抵はすぐに消えて、居なくなつてしまふのだが、ジャックは答えた。

「居なくなるつて？ 元の世界へ戻つたつてことかー？」

「さあな、そこまでは解らんさ。いきなり消えちまつところを見たつて奴が大勢居るだけだ。」

「……そう、か。」

消えてしまう、という事はやはり戻されたという事だろうか。神サマのする事はワケが解らない、と七志はため息を零す。

「とりあえず、今はここでの生活の仕方を少しでも覚えておきな。お前さんみたいな奴は、どのみち冒険者くらいにしか為りようはないんだからよ。」

得体のしれない、身寄りもない、保証人もない、そんな人間を雇

つてくれる場所など冒険者ギルドだけだ、とジャックが締め括った。

「いりするんだ、覚えときな。」

器用な手つきで四本の脚から順で毛皮を肉から剥がし、脇腹にナイフを入れる。

「普通は真ん中から裂いてしまつんだが、コイツは貴重品だからな、腹の皮は傷つけないようにする。」

で、こうして全体を剥ぎ終わつたら、川の水で綺麗に血を落として……、」

「うえつ、」

出てきた肉塊はグロテスクすぎて、さすがの七志も耐えきれなかつた。ベリベリと生皮をひき剥がす音だけでもショックが大きいといふの。」

「おいおい、マジか？　どこのお貴族様だよ、お前……。」

「だ、大丈夫だ！　で、それ、どうすんだよ。」

出来るだけ肉塊は見ないよう、視界に入れないと気を配つて、七志はジャックを睨む。彼に対しても悪感情があるわけではなく、気持ちを昂ぶらせておかないとまた吐きそうだったからだ。

涙目の七志を見て、ジャックは苦笑し、そしてまた作業を再開した。

一連の工程。

皮を剥いだら血を流し、即座に塩をまぶしてぐるぐると巻き、手ごろな薦などで縛つて保管する。

本来は、塩で締めた後に板などに張り付けて天日で干すのだが、それは街の職人の仕事だと教えられた。冒険者が現場では、皮を剥いで塩をまぶす工程までだ。従つて、冒険者の荷物には大量の塩が詰まつた袋が常備されている。

チート能力発動……！

「兎やキツネなんかだと、そのまま持つて帰つて商人にでも渡せば済む話だけどもな。

なんせ、こういう世界だ。死骸があるとなれば、幾らでも集まつてくるんだよ、掠め取ろうつて奴らがな。」

一連の工程をいざ終えてみると、いつの間にか周囲にはただならぬ気配がある。

見上げた崖の上の暗闇には、何十という数の野生の双眸が煌めいていた。

「連中も賢いもんでな、人間のする事はだいたい解かつてるらしい。俺たちが皮を剥ぐあいだは何もしてこないつてのも、暗黙の了解つてやつだ。

貴重な器官は人間が、残りの死肉は森の獣が、てな。

欲張つて奴等の取り分にまで手は付けるなよ、命が幾つあつても足りなくなるからな。」

そういうワケだから冒険者の荷物に塩の袋は必需品なのさ、と締めてから、ジャックは七志を促して死骸の傍を離れた。

リリイは苦に腰かけて待つていた。その手には、大きな緑色の物体。

それがホブゴブリンの両手だと気付いた時には、なんだかうんざりした気分になつた七志だ。

「お疲れさま、えつと……名前、まだ聞いてもなかつたよね？」

なぜだか、今さらでもじもじと身をくねらせながらリリイが七志を見る。

「あ、そつと言えば。俺、舞名七志といいます、えーと、『英語表記だと逆順になるのか、と思い返して、「ナナシ・マイナ」と言い直してみる。

きょとん、とした表情で、リリイは首をかしげていた。隣のジャックもなぜか同じく、だ。

「ナンシー？ マイナー？」

「ナノ？」

盛大に聞き間違えをして、一人があれこれと候補名を連ねていく。七志は苦笑しながら、一つひとつを否定した。

「七志だ、七志。」

「ナナシ、か！」

ようやく通じた。

「発音が珍しいから、わからなかつたー！

綺麗な大陸語だし、訛りもないのに、やつぱり変わってるわねー、

七志。」

「そうかなー？」

華麗にスルー。七志自身が、その会話の奇妙さには気付いていい様子だった。

「あたしはリリイ・フランベールよ。冒険者の端くれってところで理解しておいて。

で、コイツがジャック。ジャック・エリンって書いて、多少は名前の売れてるフリー・ランスの傭兵。」

「自分の自己紹介は自分でやるものんだろ、リリイ。さあ、こニドベズグズしてたら上の連中が痺れを切らして追い立てに来る、そろそろ出発しようや。」

荷物のほとんどをジャックが持ち、七志にはリリイの事をと促す。

「おぶつてやつてくれ、」

そしてリリイには見えないよう、隠れてウインク。……役得は譲る、と。

こうして、塩漬けの毛皮の塊をジャックが、リリイのスリムな割に豊満なバストは七志の背中が、それぞれ引き受けて立ち上がる。

「『めんね、七志。最後まで面倒かけちゃつたね……』、」

「い、いや。気にしなくていいから、」

それよりも身じろぎしないでくれ、胸が、尻が、とは思つても口には出来ない。

さらには、何か意味があるのか、バランスが崩れたのかは解らな
いが、いきなり「ぎゅうひ、」と両腕でしがみついてきた。

「な、なに……？」

心臓がばくばくと高く鳴る。声がひっくり返る。

マイナー人生で初めての経験かも知れない、女の子からの「ハグ」

「ん。なんかね、感謝してもし足りないくらいだつて、急に思い出
したの。」

女の子の、甘い匂いが鼻をくすぐる中で、七志は黙つてその声を
聞く。

「七志が居なかつたら、あたしも確実に殺られてたんだなーって。
カトブレバス以前の、『ブリンに囮まれた時点でアウトだつたと思
うわ。

だから、七志はあたしの命の恩人つてわけよね。本当だつたら、
誰だつて見捨てて逃げてく場面だつたのに……どうしよう、感謝し
すぎでこれ以上、なんて言えぱいいかわかんない。」

リリイの声は最後に涙交じりになり、ぐすぐすとすすり上げなが
らで「ありがとう、」を繰り返した。

「街に戻つたら忙しくなるぜ。」

まずは王様に謁見つてことになるだろひじ、それまでに報酬を貰
う手筈を繰り上げで急がないとな。のんびりしてると高価な皮が台
無しになる。おっと、その前にギルド登録が優先か。

「ギルドに売りつけばいいじゃん、商人通しで交渉してると間にダ
メになっちゃうわよ！」

ギルドは買い物叩くからなあ、などと、七志たちのけで楽しげな会話が続く。

「ギルドか……」

正直、想像もつかない組織だった。ゲームのシステムでしか見覚えもないのだ。

レベル分けなどがされて、実力に応じた依頼しか受けられないだとか、そんな規定があつたりするのだろうか。自分はどのレベルに分類されるだろう。とうてい、上位に食い込めるなどとは思わない。ゴブリンにも苦戦するのだから、実力は下の方だろう、と。

「七志、ギルドに登録を済ませたら、『カナリア亭』に来い。……歓迎するぜ。」

「そーよー。七志、カナリア亭にいらっしゃいよ、マスターも良い人よ。きっと氣に入るわ！」

「カナリア亭？」

いきなりの誘い。そして、意味の解らない七志にジャックが説明を始めた。

この世界には冒険者を統括する独自のシステムが存在する。

冒険者ギルドは、正しくは『冒険者の宿経営者相互補助組合』である。

巨大な組織だ。冒険者個人はほとんどがアウトローであり、社会的信用も糞もないが、その冒険者たちが利用する宿屋の方は、いずれもその土地のひとつとした有力者である。

彼らは他の職業がみなそうするように、同業で結び合い、自分たちの損害を極力抑える為の組織を作り上げていた。それはすなわち、客である冒険者の保護であり、依頼の選別や橋渡しであり、間接で流れ込むマージンの安定化だった。

冒険者はいずれかの宿に身を寄せ、少々割高な宿代を支払う代わりに、個人では入手不能な社会的信用を得る。持ちつ、持たれつ。

この世界では、宿を持たぬ者はない。犯罪者ですら、それ専門の

盗人宿が差配するギルドがある。

冒険者に対する需要の大きさに比例してギルドは成長を続け、現状は国家でさえ無視出来ない勢力を誇っている。

冒険者はみな、冒険者の宿を介してギルドの管理下に置かれ、保護されていた。

チート能力発動……！（後書き）

フェアリー・テイル作者はカードワースを知つてたんだろうか。
ワースで使つた脳内補完設定を流用。ワース寂れたなあ。o_r_z

メロンパンは120円だったはず。

毎を過ぐる頃、ようやく街へ辿り着いた。

丘の上に白亜の城がそびえている。城下町、といつ形態はその城の手前にまで広く続いていた。

街の周辺は見渡す限りで田園が広がる。ブドウを栽培しているのだとジャックに言われた。

街 자체は、よくあるゲームの舞台のようだ。まるきりの中世纪ロッパ。

リリイは医者へ、ジャックと七志は街役場へ。

「職業別で、ギルド登録の受付窓口はすべて役所の管轄だ。国王様に報告する書類を作成するため、ついでに市民登録もされて、等级が決まれば税金の額も決まる。」

国王への報告とは表向きだけで、実際には庶民の名前や総数などがいちいち報告される事などない。便宜だ。細かい管理はそれぞれのギルドに任されており、役所が気を配るのは税収だけだ。

各ギルドが徴収額を誤魔化さないよう、役所の方で書類を作成し、リスト化しているのだ。

これは地方の、貴族達が支配する領地においても同様であり、多くのギルドは国と貴族領の税を一重で納めることになっていた。直轄領では教皇の名で、貴族領と同等の額が徴収される。

王都には教皇庁が置かれていたからだ。リング教という宗教が、この世界でもっとも信仰されていた。

一連の説明を受けた七志、細かい事は省いて解説するジャック。

「ま、細かいことはいいんだよ、おいおいな。おいおい。」

「そうだな、今の俺には関係ないことだしな。」

国王や貴族とお近付きになれるわけもない、まったく関係ない話だと七志は思っていた。

「」の時は。

「レベル分けとか、そういうのないのか？」

七志の言葉に、ジャックが怪訝そうに眉をしかめる。

「は？ 強さレベル？ なんだ、それ？」

ジャックが逆に七志の質問を聞き返した。

「いや、だからさ、強さによってランクとかって……、」

「強さは名前になつて表れるもんと、わざわざ役所が調べて書き記すもんじゃないだろ。」

第一、どういう基準なんだよ、それ？ 強さなんて何をもつて決めるんだ、オークを倒すにしても、罠に嵌めて倒した奴と、ガチで戦つて倒した奴が同列になるってか？ おかしいだろ、それ。「いや、そういうんじや……。」

納得のいかない顔をしている七志。

ゲームでは、ランクというものは結構重要なものだった。なにより、自分の強さを自慢するのに、今何レベルだと言えば、それで通じるお手軽さもあつたのだ。

それらがまったく通じないと云つていい。

「国が興味あんのは、お前さんのが強さなんかじゃない、お前さんがどれだけ稼ぐかって事だけだ。」

そこで、国だけでなく、街中のほとんどの人間にとつても、お前さんへの興味は『金持つてるか？』だけだよ。」「……世知辛いな、なんか。」「そんなもんだ、お前の世界でもそういうのないのか？」

依頼人にとって大事なのは、強いかどうかじゃない、仕事が出来るかどうか、だ。モンスター退治の依頼にしたつて、散々暴れて破壊しまくるヤツより、サクッと退治だけで何も壊さないヤツの方がありがたいもんなんだ。解るだろ？」「そりゃまあ、ただけど。」「そりゃまあ、ただけど。」

「強いつてのが、どうこう意味の強さを言つてんのか知らねえが、名声つてことなら有名になれば向こうで勝手に一つ名を付けて呼んでくれるようになるわ。宿の名が知れるよくなれば、依頼も増える。」

「そうなりや俺たち同宿の者も万々歳だから、頑張つてくれ、ヒジヤックは茶化しながら笑う。

冒険者の宿は、そのままで一つの共同体であり、ブランド名でもある。

依頼者はみな、個人の名前より宿の名前を憶えていて、有名な冒険者を多く抱えている宿に依頼を出そうと考へる。宿の方でも信用に関わるために、お抱えにする冒険者は選りすぐっていた。

「俺たちの宿は、最近ギルドに加入したばかりなんだ。冒険者といつても、数えるほどしか居なかつたのが、今回ので半分殺られちまつて……。残るのは、俺とリリイとライアスだけだ。

誘つておいてなんだが、正直、来たところで高い日なんてのは期待出来はしない。お前ならもつと上等な宿に行けるだろうから、自分で探した方がいいんだが。

それでも俺たちの宿へ来てくれるつていうなら、嬉しい。……どうする？」

「どう、って、こんなところで放り出されても困る。俺、何も解らないんだし、どうするもなにも、何も解らない状態で決めろつてのもないだろ。」

今さら、ヒ七志は語氣を強くしてヒヤックに答えた。

「どうか。じゃあ、改めて頼む。

俺たちの宿へ来てくれ。立て直すために力を貸してほしい。」

改めて、書類に記載を済ませ、窓口へ。

「はい、記入漏れは……ないですね、はい、結構ですよ。」

窓口には可愛い女性職員が座つていて、受付を行つていた。

奥には男性職員も見えたが、三つある窓口に座っているのはいずれも女性だ。こういうところ、なかなかあざとい。女性を置いたほうがトラブルになる率は低いという事だろう。それも、美人を。

「あっ、あなたは来訪者ですね、失礼しました。こちらの書類にもサインと記入のほうをお願いいたします。」

新たに渡された紙には、幾つかの質問事項が記されていた。

「元の世界で自分の居た国家の名称？ 政治形態？ 宗派？ 国家に対する希望？ パン一個の値段……て、そんな事まで書くのか。」

「 順番に設問を埋めていく七志の手元を、職員の女性が興味深げに眺めている。

「これらの意味するところを七志は理解していなかった。国名前や住んでいた土地の名などはフェイクで、役人たちが関心を持つている事柄はそれ以降にある。」

政治形態や宗派によって専制君主に敵対する者であるかどうかを見極めることが目的だ。

馬鹿正直に民主主義のなんたるかなど書き殴れば、危険人物のレツテルを速攻で貼られるだろう。そうなればもはや、冒険者だの問題ではない。

それでなくとも異世界からの来訪者というだけで、特別視されやすい傾向にあり、またカリスマ性も持ち合わせている。国がこれを警戒しないはずなどなかつた。

七志は運だけで数々の危険をかいくぐってきた。

今回も同じく。

「国家は、『日本』。政治形態は、民主主義……いや、『議会制政治』の事聞いてんだろ？ うん。宗派はなんだつけ？ 『真言宗』？ 適当でいいか。本当は無神論者だったけど。」

神サマ居たもんなー、と、ブツブツと呟きながら書き綴る文字を、

横合いから興味津々でジャックも見守っている。

「国への希望ねえ、うーん……『仕事ください』。

パンて、菓子パンかな？『メロンパン120円』って「か？」

全ての欄を埋め、職員に渡したところで更に質問がきた。

「議会制政治とは、詳しく述べどういったものでしたか？」

「え？ えーと。日本という国はですね、天皇陛下が居て、衆議院と参議院があつて、選挙があつてですね、法律とかは議会で決めることになりました。で、富内庁が発表して、……して？ だっけ

？」「あ、はい、結構ですよ。解りましたので。ありがとうございました。

た。

では、あちらの窓口へお回りください、市民等級が決定されました、あちらでお知らせ致します。」

しどもどろの説明をぴしゃりと締め切り、ここやかな笑顔で職員女性は七志を強制的に追い立てる。

隣でジャックがくつくつと笑っていた。

噂をすれば、特丸クエスト依頼。

七志が、政治や国家にほとんど知識がないと解ると、職員はにこやかな笑顔は崩さないままさつさと七志を追い払った。後がつかえているという事もあるが、なんだか邪険に扱われたことだけは感じ取れたので七志は気分が悪い。

「お役所ってのは、どこも一緒か。」

「ほれ、七志。じつち、じつち。」

ジャックが手招きしている。

「むくれるなつて、役人たちはまだ笑顔なだけマシなんだからよ。あれで？」

「もつとヒドいのがそのうち来るからよ、まあ見てな。」

しばらく待つて別の窓口から回答の書類を貰い、七志の市民登録が終了すると、それまで知らん顔をしていたジャックが改めて役人に話しかけた。

「ついでで悪いんだが、これを買い取つてほしいんだけどな。」

「これは……、カトブレバスの毛皮ですか！？」

おどろいた役人の声に、場が騒然とする。

しかし倒した当人である七志は、一目見ただけで解るもんなんだなあ、などと少々ボケた感想を抱いて見ているだけだ。

「よお、ジャック。特丸クエストを受けて、生きて帰ったのか。さすがだな。」

「よお、タイラー。手出ししなかつたお前さんの眼力のがスゲェよ。ひでえ目に遭つた。」

同じ冒険者だろうか、見るからに悪党面をした男が近寄つて、ジャックと一言一言の挨拶を交わした。

入れ替わりでまた違う誰かが声を掛ける。

「ジャック、タイラルマウンテン攻略に参加したんだって！？」「攻略戦じゃねえよ、斥候役だ！まあ、中身は同じようなモンだつたけどな！」

離れた場所から掛けられたその声にも、ジャックは律儀に答える。勝手の解らない七志はただ成り行きを見守っているだけだ。

窓口の女性職員が皮袋を手前の台に置いた。それを掠め取るよう受け取つて、ジャックは七志を引っ張つた。

「今まだ余計なことを言つんじゃない、アイツを仕留めたのが誰か聞かれても曖昧に答えとけ。」

「別に構わないけど、」

「なんでだ、と聞こうとした時に、玄関付近が急に騒がしくなつた。騎士団だ、使者が来やがつた、と口々に囁く声。

「『ヒドイ』のが来やがつたぜ、噂をすればってヤツだな。」

見れば、一見して解かる立派な身なりをした者が数名、玄関扉を押し開いて入つてきたところだった。

新品同然に磨き上げられたスチールの鎧に、深紅のマントはベルベッドの光沢を放つ。上等そうだ。

「静まれ！ 騎士団からの広報を伝える！」

怒鳴らすとも聞こえているのだが、格式だのの問題であろうか、先頭の騎士は声を張り上げて場内に向けて宣言した。続けて別の騎士が。

「今回、タイラルマウンテンを攻略するにあたり、新規に傭兵を募ることとなつた！」

報酬は一人につき、一日200Gを支給する！これにより、全行程一ヶ月の最低報酬6000Gが保障される！更に、めざましい活躍をした者には国王陛下より、直々に報奨金を賜る栄誉が与えられる！

募集人員は100名！ 募集期限は本日より一週間！ 先着順とする！」

一気に言いおいて、一区切り、息を吐いた。

そして、場内の人々を見回し、一瞬だけ七志と目があつた。

当然、七志に注目などするはずもない、すぐに視線は逸れてゆく。最後にまた怒鳴った。

「……國に忠義を示す場であるー 多くの者の参加を期待しているつー 以上だつー！」

言つだけの事を言つて、彼らはさつと役所を出でていった。

職員が慌てて、あらかじめ用意されていたであろう募集要綱の張り紙を掲示版の一一番目立つ箇所に貼り付けた。掲示板には数々のクエスト要綱がメモ紙のように貼り付けられ、これまた所内の一番目立つ場所に置かれて、人々が覗き込んでいる。

「先のクエストは騎士団の連中が告知なしで、じつそりと貼つてやがつたものだつたんだ。冒険者を投入して、敵がどのくらいの勢力かを測るために利用しやがつたのさ。

クエストを受けた3チーム、20名のうちで生き残つたのはお前も「存じの通り、たつたの2名。少数精鋭の騎士団のみで処理しうとうという腹だつたんだろうが、この結果を見て、方針を変えたつてとこだらうよ。」

「そんなフザケた依頼、受ける奴居ないだろ？」

詐欺のような手口で利用されたと知つてゐるなら、当然、参加者などない、と七志は思つた。

「ああ。初期の集まりは悪いだらうな。

けどよ、そうなりや連中はギルドに圧力を掛けときやがるだけなんだよ。宿一軒につき、何名の参加を要請する、てなもんでな。断りや、べらぼうな税をふっかけてくる。」

「なんだよ、それ？ ……本当にヒデュな。」

なんとも言ひようのない胸の悪さを憶え、七志は両手の拳を打ち合わせた。

「だから、連中からの依頼は特丸と呼ばれてるんだ。サイアク、て意味でな。」

耳打ちされた言葉を聞いて、頷いた時、なんとも言えない嫌な感覚が走った。

予感がする。特別に嫌な予感。

もう一度と、あんな場所へは行きたくないのだが。

また、ゴブリンに追われて逃げ惑う自身を想像してしまい、七志は慌てて打ち払う。

「冗談ではなかつた。

「さあ、じつちの用事は全て済んだ。さつさとリリイを迎えて行つて、宿へ引き上げようぜ。」

「リリイの怪我、酷かつたけどちゃんと治つたのかな、」

「死んでない限りは元通りにしてくれるのがヒーラーって職業や。ただし、怪我に限るけどな。」

この世界の治癒魔法は、物理的な損傷に対しても有効なのだ。病気やメンタルダメージ、憑依などによる衰弱などを回復する力はない。傷はお好み次第で跡形もなく消すことも出来たが、そこまで完璧に治癒させるとなると、多額の治療費を請求される。

治癒魔法の習得には個人差が激しく、適性が合う者は本職として看板を掲げている。その中でも一握りの者だけが、傷跡すら完璧に治癒させる事が出来る。そのくらい高度な能力を有する。

そういうた一部の高位ヒーラー以外には、例えば潰れた目を再生させることなどという事は出来なかつた。

「リリイは帰つたらしばらくは安静にさせとく事になるかな。あれだけの怪我だ、おまけに衰弱も激しい。傷が治つても、病気になつて死んでたんじゃ、洒落にならんからな。」

怪我が原因で死ぬ者は少なかつたが、その怪我で衰弱した為に感染症に罹り死亡する例は多かつた。

その後、リリイと合流、三人はようやく、古巣への帰還の途についた。

そうだよ、運だけだよ、俺は。

街から外れた田園の片隅に、小さな丘陵が見える。この辺り一帯がブドウ畠とかで、僅かばかりの立木の他はすべて緑の絨毯だ。

緑の田園と緑の丘。その丘の上に建つ白い建物が、一つぽつんと景色の中で浮き上がっていた。

「おかえり、ジャック！ リリイ！」

ふくよかな体格をした中年女性が、宿屋の戸口の前で待っていた。彼女は三人を見るなり大きな声でそう言い、手を振る。

「おかみさんのマリーよ、七志。一家で冒険者の宿を経営してて……あたし達にとつては母親同然の人。」

「へえ。」

人の良さそうな笑顔に好感が持てる。出て行つた者の何名かは命を落としたという事実をまだ知らないらしく、彼女の表情に影はない。

「さて、どう説明したものかね……、」

神妙な顔つきになつたジャックが呟いた。七志が彼と知り合つてから先、こんな顔を見るのは初めてだった。
明るく出迎えようという夫人に対して、三人の足取りは重くなる一方だ。

「そうかい、他のみんなはもう帰つて来ないのかい……。」

目頭の涙を指先で拭い取り、夫人は寂しげに呟く。

宿へ戻つすぐ、二人はクエストの顛末を語り、共に出かけた仲間が帰らぬ人となつた事を告げた。

冒険者などという職を生業とすれば、こんな場面は日常だ。想いを振り切るように夫人は大きく頷き、自らの持ち場へと戻る。すな

わち、宿のダイニングへ。

それを見て、生き残りの一人も気持ちを切り替えてゆく。
日常にありふれた死。いつまでも引きずつてはいられない。

「ところで、二人が連れてるのは新入りかい？ 変わった服装だけ
ど、どこの人だい？」

「あ、彼は七志よ。よりによつて、タイラルマウンテンに放り出さ
れちゃつた運の悪い来訪者。」

「へえ！ それじや、言葉は通じないのかい？ で、どんな能力を
貰つたんだい？」

夫人の言葉に、三人は互いの顔を見合せた。
こうして、ようやく気付くことになつた、七志の力に。

「便利つちやあ、便利だけどなあ……。」

「なんだか……よね。」

他になかったのか、他に。そう言いたげな一人。

「以前来た来訪者は剣の名手だった。とんでもねえ遣い手で、ゴブ
リンなんぞ、それこそものの数じやないつてくらいに強かつたけど
なあ。」

チラリ。

「あたしが噂に聞いた来訪者は魔法の天才つて話だったわ。パチン
と指を鳴らせば、天から火の矢が降り注いだそうよ。」

チラ。

「俺を見るな、俺を。」

何か言いたげな一人に向かつて、七志は不機嫌そうな視線を向け
た。

「前に言つた通り、そういう連中は決まつてどこかへ消えちまつた
んだけどな。」

「あんまり脅かすなよ……、そつちは大した問題じゃないのかも知
れぬ。」

れないうけど、俺にとつては他人事じゃないんだから。」

その一言の後だ。カウンターの中から夫人が話に割り込んだ。

「七志、あんた、武器は使えるかい？ 無理なら魔法とか。」

「いえ、ぜんぜん。」

七志の答えに、ジャックとリリイは目を丸くし、夫人は納得顔でうんうんと頷いた。

「あんた、武器も扱えないでよく……！」

あの山で生き延びてこれた、と言いかけてリリイは言葉を止めた。その状況を実際に見ていたのは他ならぬ自身だ、そういえば、七志の振るう剣はどう考へても素人の扱う滅茶苦茶なものだった。よく生き延びられた、と今さらに目の前の少年の強運に感心する。再び夫人が口を開く。

「じゃあ、七志。あんたがまずやる事は、ライアスに弟子入りして剣技を教わることだね。」

夫人が意味深な笑みを浮かべてそう言った。

「ライアスって？」

「今回のクエストに参加しない仲間よ。実質、この宿の冒険者で生き残つてる最後の一人ね。」

リリイが答える。

「どいかの国の騎士だつたそうよ。馬鹿な王様のせいで国が滅びて、仕官するのも嫌になつて冒険者に鞍替えしたんだつて。
だから、剣の技量はなかなかのもんね。金は持つてるし、趣味で冒険者やつてる醉狂な御仁よ。

詳しいことは本人に聞いてらっしゃいよ、裏庭に居るはずだからさ。」

リリイが視線で示す方向に七志もつられて目を向ける。ジャックが後押しで口を挟む。

「奴の剣は正統派だから、教えてもらつにや丁度いいな、確かに。剣の他、槍、棍棒、斧、弓なんてのも使うはずだから、自分に合

つた得物を見つけてもらえ。」

人それぞれ得手不得手がある、苦手な武器で生き抜けるほどこの世界は甘くないから、トジャックは言い、立ち上がった七志の背を推した。

裏庭へ向かつた七志を見送つた後のキッチンでは、まだ二人が居残り話を続けている。

「七志、可哀そう。良い子なのに……。」

「翼の神々は底意地が悪いからね、お遊びに付き合わされる者は災難だよ。あの子はまだ言葉が通じるだけマシかも知れない。どれだけ強い力を貰つても、人々に忌み嫌われては為す術がないんだからね。

そうして……いずれ、魔物になつてしまふ、火の山の魔女のよう

に。

突然消えてしまう異界から來た人々。消えなかつた者は決まって魔物となつた。そして、同じように異界から飛ばされてきた者に討たれた。

その不思議な現象を、人々は色々と推測していた。そして産まれたのが悪神伝承であり、召喚された人間は以前に召喚されて魔物と化した者を討つために呼ばれたのだと言われた。

だから、人々は來訪者に真実は告げない。

要らぬ情にほだされ、魔物を野放しにされでは困るのだ。

「あの子はきっと、火の山の魔女を討つために呼ばれたんだろう。

魔女を倒した後は、他の來訪者がそうであつたように、消えてしまつんだろうねえ。」

「贊にされる、と言つが……おい、リリイ、七志には言つなよ。」「言えるわけないじゃん、」

風呂 裏庭 フルマラソン

一方、七志は裏庭に居るところライアスを探していた。

裏庭といって、垣根があるわけでもなく、小さく開けた場所に薪割り台と井戸があり、その向こうはそのまま畑に繋がっている。

「ここに居るって聞いたけど……、あ、あの人かな？」

七志が田を向けた先には、薪の山を整理する老人の姿。腰には剣を帯びている。

背筋がピンと伸びて元気溌剌という感じの小柄な男が、一人黙々と働いていた。撫で付けられた頭髪も真っ白なら、立派な口髭も真っ白だ。

「あの、貴方がライアスさんですか？」

「いかにも。すまんがまずはこの薪運びを手伝ってくれんか。」

七志が話すよりも先に、その腕に薪の束をほい、とばかりに渡されてしまった。

「ふむ。わしに弟子入りがしたい、と。」

「はい、宿の女将さんに紹介されたんですけど、馴染でしようか？」

「ふーむ。」

老人はしげしげと七志を見やり、口髭を撫でる。

「まず武器を振るう筋力がまったくなさそうじやな。」

制服の上からでも解かるのか、ライアスはきつぱりとそう言った。

基本以前の指摘を受けて、七志がうなだれる。これは望みが薄い、と。

だが、引き下がるわけにはいかない。なにせこの世界での生活、いや、命が掛かっている。なんとかして承諾してもらおう、と決意を新たにした時に、再び老人が口を開いた。

「これからは、毎日の薪割りと風呂焚きはお主の仕事にするが良い。それである程度の筋力は得られよう。」

「それって、弟子にしてもうれるって事ですか！？ やつた！！」

喜びを満面に表す七志に、ライアスはにんまりと笑った。

薪割りに風呂焚き。それは、日常生活のうちの、最大の重労働である事を七志は知らない。

「ほれ、斧の構えはこいつじゃ。腕はゆるく伸ばし、そのまま振りかぶる、逆らわず振り下ろす、真芯に当たればこのようにガツシリと食い込むでな。これを再び振り上げる、打ち下ろす、そうすると真っ二つに割れて、落せる。」

言葉と共に実際を見せてもらい、七志もうんうんと頷く。見ている分には簡単でも、これこそ本来の言ひは易ぐの典型だ。斧を手渡され、ずしりと重いその重量に不安がよぎった。

「やつてみる、」

言われて、七志とライアスが位置を変える。土台となっているのは太い根っこを加工したものだ。その上に丸太が乗せられ年輪を向けている。

振りかぶつて、振り下ろす。たつたそれだけの事が難しい。

何度かは土を叩き、何度かは斜めに刺さり、何度かは根っこの中を削つた。

ようやく真ん中を打てるようになる頃には、七志は全身汗だくになっていた。

ライアスが隣でひよひよと薪を割つている。

「ほいほい、薪が出来たから次の仕事にかかるつか。」

七志がようやく数本の丸太を割つたところに声がかかり、山となつた薪をライアスが指差した。

恥ずかしさにつづむく。この老人がこれだけの薪を作る間に、自分がした事といえば、たつた数本を二つに割つただけだ。これでは先が思いやられる。

「落ち込むのは結構じゃが、後にしてくれんか？　まだまだ仕事は終わつておらんから。

次はこの薪を向こうへ運んでもらおうか。運んだら種火を貰つてきて、風呂を沸かす。窯に火が入つたら、その井戸から水を汲んで風呂桶へ運ぶ、風呂桶の八文目まで水を満たせば裏へ戻つて火の番をする、時々風呂の湯加減みて、ちょうどになつたら女将に知らせる。

そこまでが風呂焚きの仕事じゃ。」

水汲みは急いで汲まんと風呂桶から火が出るからな、と付け足した。

本来は水を汲み入れてから種火を仕込んで湯を沸かすのだが、ライアスの手順は逆だつた。

のんびり井戸に釣瓶を垂れていたのでは鍛錬にならないからだ。竈に種火を放り込み、そこから藁屑、枯葉や小枝と順繩りに火の勢いを増してやり、薪の方へと火を移す。そこからが忙しくなつた。慌てて井戸へ向かい、慌てて水を汲み替え汲み替え、釣瓶から木桶へ移して両手に持つた。

重い木桶を慌てて運ぶ。宿屋を半周して、土間を通り、廊下を走つて、風呂桶へ流す。

息をつく間もなく、慌てて戻り、釣瓶を垂らして水を汲み、木桶を満たして、廊下を走る。

焦げた臭いがしてくると、隣を走るライアス爺が「ほいほい、火が出る、火が出る、」と急き立てる。

重い桶を、腰を落としてバランスを取りながら零さず運ぶのは、思う以上に大変だった。

「ぜえ、ぜえ、」

風呂桶がちょうどの水位に達して、窯の前へ七志が戻る頃には、額から喉元からと、盛大に汗が吹きあがつて流れ落ち、制服の下の

アンダーシャツを汗だくに濡らしていた。

風呂桶は食料を保存する樽を少し大きくしたようなものだった。

そこから各自で湯を汲み取って風呂場で使うのだ。

桶の底が一部分、鉄で出来ていて、たぶんその向こうが裏手の窯に繋がっているのだろう、と七志は思った。床全体が暖められて、蒸し暑い。

サウナ方式の風呂を、七志は知らなかつた。

国王様がお呼びです。ｂｙ城からの使者

宿の食事は素朴ながらにとても美味しい品々で、来たばかりの七志のためにと御馳走を振る舞つてくれたらしく、鶏の丸焼きまでがこの日の食卓には並んでいた。

なにより七志が気に入ったのは、食後の「ザート」として出た木苺のパイだ。

宿の女将は料理上手で、朗らかで、どんどんと七志に食を勧める。「さあ、もつとどんどん食べとくれ！ 遠慮しなさんな、あんたくらいの子はもつと食べるもんだ！」

「も、もつ、充分にいただきました……」

わんこ蕎麦のごとくに、食べるしりから目に盛られ、七志は皿を白黒させながらギブ宣言。それでも女将は「まだまだ！ 遠慮しないいいんだよ！」と、ようやく空になつたボウル皿に再びシチューを注ぎいれる。

勘弁してくれ、と目で助けを求めた七志に、しかしジャックトリイは素知らぬ顔を決め込む。

割と薄情な仲間たちだった。

食事も済んで、割り当ての部屋へと引き取つた七志。

「じゃつぱりとした、言い換えれば何もない部屋で、窓際に簡素なベッドが一つに、備え付けのクローゼットが一つ。嵐のよつな数日が過ぎ、よつやく一息つけたこの時になつて、七志は元の世界に思いを向けた。

よつやく、そういう余裕が出来たのだ。

それどころではない状況で忘れていたが、家は、家族は、友人たちはどうしているだろうか？

突然居なくなつた自分を心配してくれているだろうか？

今さらに寂寥感が込み上げて、どうしようもなく悲しくなつた。

もう、帰れないかも知れない。

追い打ちのように思い出される言葉もある。

来訪者は消えてしまうという話にしても、手放しに期待していいものとは思えなかつた。そんなに楽天的な性質ではない、消えてしまつと言つて「元の世界へ帰ると保障されたわけではないから」。

不安は山積み、けれど一々気にしている余裕もない、と自身を叱責してベッドへもぐり、無理やりでも眠ろうと務めた。

異世界の一日はハードだ、明日のために寝ないといけない。

感傷に浸るよりも明日のことを考えよう、と、七志は目を閉じ、ひつじの群れを数え始めた。

翌日は朝から薪割りだ。

足元も危なつかしく、ふらつく七志の横で、昨日と同じにライアスがテンポ良く薪を割つていいく。

七志が動かぬ丸太一本を相手に四苦八苦している時に、血相を変えてリリイが裏庭に駆け込んできた。

「七志、お城からの遣いが来てるわ。あんたに会いたいそようよ。」

息を切らせ、七志に薄く半透明な白い紙を渡す。羊皮紙というものが見たことのない七志は、それがとても上等なもので、王侯貴族くらいでないと使えないほど高価な品だとは思わなかつた。

文面は少々高飛車、事務的に登城を要請する内容だ。謁見が許されたので來い、と。

願つた覚えもないのに、と不満を表情に浮かべていると、ライアスが横合いからその紙をひょいと奪つていつた。

「国王からの召し出しか。」

内容を流し読んで、そう言った。

続けて七志にアドバイスを。

「貴族というのは自分を天使かなにかと思つてゐる。終始にこそこと愛想良くして、言われたことははいはいと頷いておくが良い。常に

に靴を見て顔は上げぬよつ、田を畠わせる者を彼らは生意氣と受け取る。

チラリと見せる嫌な顔は彼らの勘に障る、嫌だと思つたらむしろ悲しそうな顔をして、困ると訴えるがいい。

人に相談すると言ひつのもよくない、考えさせてください、と言つのが良い。」

常に言葉を選ぶよう、相手は自分を一番良いものと思つてこる、とライアスはもう一度言つた。

昨日弟子入りしたばかりでも、自身を子弟と認めて扱つてくれた事に感謝して、七志は深く礼を表す。

行きたくない。が、会わずに済ませる道はないようだ、七志は重い息を吐いた。

リリイの後について宿のダイニングへ向かう。

宿の中ではそこがもつとも広く快適な空間だから、客はひとまずそちらへ通されるのだ。

使者はふんぞり返つて待つていた。

小太りの、小男。きらびやかな衣装に身を包むといつよりは、着られている。

国王もこれと同じ種類の人間かも知れないと思つと、それだけで七志の気分はさらに重くなつた。

七志に気遣う視線を向けてから、リリイが口上を述べる。

「お待たせしました、こちらが使者様のお呼びになつた来訪者の、七志です。」

「はじめまして、」

「つむ。硬くならずとも良い、わたしは单なる使者。国王様より全権を任せているとはいえ、单なる使者に過ぎぬからな。構えずとも良いぞ、うむ。」

使者というものは、さほどに地位があるところともない下っ端の役人であったが、とかく王権に擦り寄つてうまい汁を吸おうとい

う輩は、どんな肩書きあれ利用しようとする。

言葉の隅に表れている。厚顔としか言こよつがない体で、露骨に袖の下を要求している。

この小役人の口先一つで、ありもしない言葉を吐いたことにされ、謂れのない罪に落とされたりもする。邪険に扱うことも出来ず、無体な要求でも呑むしかない。

剣呑な目をした七志に、慌ててリリイが使者の手にて自身の手を重ねた。

掴ませているのは、おそらくは金貨だらう。

ぐつ、と堪えた。考えなしに怒鳴りつけば宿に迷惑がかかる。そうした事も含んで、国王からの召し出しが迷惑としか言こよつがなかつた。

「国王陛下はそちの活躍をお聞き及びになられ、いたく感心なされたご様子でな。」

例の、ほれ、カトブレバスという化け物だ、あれとの戦いの話などをお聞かせすると良いぞ。お喜びになられるであらう。名誉なことであるから、くれぐれも失礼のないよう。

そうそつ、来訪者とお会いになられる事は特例でもあるゆえに、な。そのような汚いナリではなく、そうそつ、その特異な服装だが、それもご覽になられるゆえに、当田にはきちんと洗濯をしてから、城へ上がるように。くれぐれも、な。」

使者は、どこまでも勿体ぶって、文章的にはおかしくなってしまつた言葉を区切り区切りで言い置いて、深く息を吐き出した。
偉そつこほしているが、どこか三流の匂いがした。

使者は、七志を迎えて来たわけではない。

端くれとはい、貴族。その貴族の乗る馬車に、どこかの馬の骨とも素性も解からぬ下民同然の人間を、同席させるはずなどなかつた。七志は明日、指定の時刻までに一人で城へ行かなければならぬ。

もちろん、支度費などという気の利いたものは出ない。いや、出ているのだろうが、小役人が素直にそれを渡すはずなどなかつた。七志はとにかく、気が重い。すごぶる、重かつた。

遠路遙々苦労であった。ｂｙ国王

翌日、言われた通りに七志は一人で王城へ向かつた。

道も解からぬ来訪者だから、当然、城門の前まではリリイが付き添いで来てくれた。だが、そこから先へは進めない。下々のための融通など、王家が取り計らう所以もない。

謁見の間は絢爛豪華だ。見栄とハッタリのために、そうする必要があり、そうなつてている。

ここで七志は三時間待たされた。

椅子などない、立ちっぱなしの三時間は厳しいが、ようやく現われた王侯貴族たちは、誰ひとり謝罪もしなければ悪びれる様子もない。

当然だ、平民は王族に会えるだけでも感謝しろ、というのが彼らの言い分なのだ。

「ふむ。そちが来訪者と呼ばれる者か。その衣装はなんだ、僧服か？」

待たせた事には一言も触れず、いきなり王様はそう言った。

自分はちゃんと中央の玉座に座り、七志は立たされたまま。「いかにも細い身のように見えるが、そちは稚児か？ それにしては不細工だのう？」

幾分小馬鹿にしたような口調で、国王はさらりと言葉を足して鼻で笑う。

確かに、見たところでは王侯貴族という割に、他の者たちよりも明らかに筋肉質な体格をして、中世だか古代だかの露出多寡な鎧を纏ついても似合っている。武闘派というイメージアピールのために着ている鎧がいかにもゲームに出てくる悪役のような雰囲気をこの人物に与えていた。

明るい金色のゆるく巻いた髪。彫の深い顔立ちは、七志を鼻で笑

う程度には整つてゐる。

まだ歳も若いようで、周囲に対する威嚇を含んでこのよつた物々しい恰好をしているのだろう。先代の国王が崩御してから数年、王権は盤石とは言えない状態だ。

「こ汚い服に、貧弱な体。魔法も使えぬと聞いた。化け物を倒した勇者と云うが、とんだ期待外れだ。

どうせペテンであろう、正直に言うてみよ。そなたが化け物をたつた一人で倒すなど、到底信じられぬわ。」

すかさず、隣の貴婦人からも悪しきまゝな言葉が飛んでくる。

「頭の具合も悪いのである？ そのよつたな顔をしておるぞ、ほほほ。」

「これ以上ないほどの一言。諸侯の忍び笑いが聞こえる。

『ふつ、』

うつすらと笑みを貼りつけて、七志は罵詈雑言を聞き流した。

見てくれの判断など痛くも痒くもない。七志は文筆家志望、文章をこき下ろされる時のダメージに比べれば、この程度は蚊に刺されるほどにも感じない。

某掲示板に作品を晒し者に提出すれば、この100倍の痛烈な言葉が返つてくる。

四方八方から。

その激辛刺激に比べれば……。

『痛くねえ。ちつとも痛くねえぞ、クソ貴族ども。』

七志は俯いた下で不敵な笑みを浮かべていた。

それでも悪口に対してもつたく無反応でいられるほど凶太い神経はしていない。

ムカムカとボルテージを上げ続ける怒りのパラメータが振り切れるのは時間の問題だ。

一方の国王にしてみれば、ここは諸侯に対して自身の審美眼を披

露するに絶好の機会、得体の知れない来訪者という存在を正しく評価することによって、自身の評価も上がるという理論見がある。

「ふーむ。」しばらく唸った後に。「剣も使えぬ、魔法もやれぬ。おそらくそなたは運だけで生き延び、偶然を味方につけて強敵を倒したのであらう、違うか?」そう言った。

瞠目。

『……コイツ。……出来る……』

国王の見立てだけでなく、王妃の見立ても当たっていた。

その後の紆余曲折は省く。そして、七志の武勇伝がようやく披露される運びとなつた。

小馬鹿にしても、居並ぶ諸侯は興味津々だったようで、皆、七志が語りだすのを待つていて。

だが……。

期待の込められた眼差しは一つ、また一つと七志から外されてゆき、にこやかだった笑顔もうござりとした不機嫌なものに変わる。

七志は口下手だった。

「ゴブリンには石を投げてですね、けよひど淵になつていたので飛び込んでですね、……えーと、」

「もうよい。」

しつしつ、まるで犬の仔を追い払う仕草で国王は七志の言葉を遮つた。

なんだかデジヤブを感じる。そう言えば街へ来たばかりの時に役所の受付嬢が、にこやかに同じセリフを言いやがつた、と七志は口を噤みながら思い出していた。

「何はともあれ、そなたはゴブリンの群を退け、ホブゴブリンやカトブレパスという恐ろしい化け物に対峙しても生き延びることが出来たという事実に変わりはない。」

それはひとえに類い稀な強運のなせる業。女神がほほ笑むのである。

「うつ、そち」「うひ

「で、あれば。

次なる行軍には我も出る。その時にそちの強運が付いてまわれば、ゴブリンなどものの数ではない。

七志よ、我が軍の殿（しんかり）を務める栄誉を授ける。これは王命である、有難く拝命するがよい。」

「お断りします！」

七志はきっぱりと、胸を張つてそう言った。

間髪いれぬ国王の言葉が続く。

「うむ。そちには特別に従者を一人付けることを許す。同宿の者より一名を選び、連れてまいるがよい。」

うぐう。国王の切り替えしに七志は呻いた。

王の顔をちらりと盗み見れば、逆らえばさうに状況を悪くしてやる、とばかりに嫌な笑みを浮かべている。

俯いた七志と見下す玉座の国王と。

「……お引き受けいたします、」

しばしの沈黙の後、折れたのは七志のほうだった。

「賢明な選択であるぞ。」

勝ち誇った満面の笑みが小憎たらしい。王は続けて言った。

「ふむ、そうとなれば我が軍に恥ずかしくない装備を『えねばならんな。』

フィオーネ、そちが選んで『えよ。』

「ははつ。」

控えていた諸侯の中から、やはり鎧甲冑を着込んだ女性が進み出て額をいた。

モーニング スター！

フィオーネと呼ばれた女性は、七志に顎で合図を送り、付いてこいと先に立つて歩き出す。

やはりぞんざいで居丈高な態度。

王侯貴族にいい人なんて居ない、七志は確信しつつ後についていった。

軍人的ないでたちの彼女は、少々刺激の強い鎧を纏っている。露出が多く、臍が丸見えになつていて、デザイン的には腰当ての金属部で防御される造りのようだ。

国王と同じ輝くような金色の髪と紺碧の瞳。さらりと流れれる髪は国王と同じウエーブを持つ。

「この部屋が備品の保管庫となつてている。中へ入れ。」

部屋といいつつ、とてつもない巨大な扉を前に、七志はおつかなびっくりで周囲を伺つてしまつ。

「わたしも兄上と同じく、貴様が化け物を正面から倒してのけたとは思つていない。そもそも、おかしいではないか、その貧弱なナリで、どうやつてあの怪物のパワーと渡り合えるというのだ？」

「正直なところを言えれば、俺が倒したつてよつは奴が自滅したつてほうが合つてます。」

七志の言葉に、フィオーネは得心して満足げな笑みを浮かべる。

「うむ、そうだろう。そちは嘘吐きだが性根は曲がつていないうだな。」

噂には尾ひれがつく。七志は自分が倒したとは一言も言つていなが、いつの間にかそういう事になつて、王宮には届けられている。陥れようという意志は秘かに何処にでも忍び込んでいるものだ。

キツそうな美人というイメージを抱いていた七志は、笑うと可愛いんだな、などという本来どうでもいい事柄を思い浮かべ、言葉の

内容についてはさほど氣にも止めていなかつた。

「ライアス殿だと！？」

「はあ、そう聞いてます。」

師事している元貴族のじいさま、という話に及んで、フイオーネが訊ねたのはその人物の名前だ。

この驚きようは、もしかして、あのじいさんは凄い人なのかも知れないな、程度には七志も事態の異様さを感じ取っていた。

「の方は、兄上の再三の出仕嘆願にも応じなかつたくせに、こんな馬の骨を弟子にすることは引き受けたといつのか……！」

美しい顔を怒りに歪め、フイオーネはイライラと爪を噛む。

腹に据えかねる、という気持ちはよく伝わつた。

馬の骨扱いのこのムカつき具合とどちらが上だろ？

引きつった微笑みを浮かべながら、七志はじつと耐えていた。

それから後、倉庫の中に整然と並べて保管されている各種の武具を眺めながら、フイオーネの講釈が述べられるのを七志はふんふんと聞いていた。

「七志と言つたな。武器の扱いも知らぬ、貧弱で体力もない、そんなお前が扱えそうな武器となれば限られてくる。剣の類はまず無理だ、どれも重量があるからな。無理に振るい続ければ手首を痛める。お前には決定的に筋力が足りぬのだ。それを補う武器でなくてはならん。」

「はあ……、」

得意満面なしたり顔でフイオーネは蘊蓄を並べていく。七志は感心して聞いているだけだ。

七志の口を通じて、自身の評価がライアスに届くものという計算がある。従つて、平民風情に掛けるにはありえない程の丁寧さで、彼女は七志に接していた。

これがライアス絡みでなければ、適当にブロンズの剣でも『えて

せつせと引き取らせている。

七志はもぢろん、気付いてもいなかつたが。強運がここでも發揮されていた。

「これが良かるつ。……モーニング・スターだ。」

彼女が七志に選んで与えた武器の名だ。棍棒というより、マラカスという方が近い形状。ただし、先端の丸い部分には凶悪な鋭い棘がびつしりと生えていたが。

「うへ、」

思わず、声に出してしまつ。さすがにスマートな戦闘を想像させる姿でない事は素人の七志にも解かってしまう。

「嫌そうな顔をしているが、お前が使えるうちでは最上のものだぞ。なにせ殴るだけで、コツも技術も必要ないのだからな。とりあえず戦える、有難く思うがいい。」

予備のものを合わせて二つの凶悪な武具が七志の手に委ねられた。

「次は鎧だが、お前に重い甲冑は無理だな。なめし皮の胸当てと鉢金、肩当ては棘付きにしてやる、これでタックルをかければ大概の敵は怯むからな。くくっ、」

武器の次には防具の選択。コーディネイトを考える時の彼女は妙に嬉々として見える。

サディストの氣があるのだろう。

「宿の方にはぬかりなく届けておけ、一品でも足りぬとなれば関わるすべての者が処分されると心得よ。よいな。」

控える従者にそう含み、指示を飛ばして下がらせた。

実際にやつてのけもする、それでもしなければ王命は蔑ろに、七志の元へは鉢金一つ届きはしない。王権を維持するためにも多少の恐怖政治は仕方がないものだった。

乱暴な時代だ、とても乱暴な。

当の本人が呆気にとられるうちに、装備の一式が揃えられ、七志のための荷物となつて、運び出されていった。

「酒でもやりながらライアス殿の話でも聞きたいところだが、わたしもこう見えて忙しいのだ。

討伐隊の編成を任されているのでな。お前は殿、重要な部隊を率いることとなる、覚悟して掛けられ。」

「え!? 部隊を率いてつて、」

聞いてない、とは言えなかつた。そんな空気は微塵もない。

兵舎へ場所を移しての会話だつた。忙しく立ち働く兵士たちに、七志に興味を向ける余裕のある者など一人も居ない。皆がピリピリと殺氣立つてゐることも、雰囲気で解かつた。

「兄上に引っ掛けられた事に気付いておらぬのか。」

意地の悪い微笑を浮かべてフィオーネはくすりと鼻を鳴らす。

「お前の責任は重大だ、下手をすればお前の率いる数十名の命が消えてなくなり、さうに下手を打つなら全軍が壊滅という状態にもなりかねん。」

それが嫌なら、師匠を引っ張り出すのだな、ライアス殿ならば巧く陣頭指揮を取るだらうからな。」

冒険者の宿の些末な情報など興味のない王政府でも、そこに散らばる重要な情報だけはしつかりと把握している。どの宿に手練れが居り、どの宿が勢力を伸ばしているか……。

「そうでなければ、王など務まらぬ。そつは思わぬか? 来訪者よ。

「

作戦会議、俺は居るだけ。

氣付かぬうちに絡め取られていた。
重い足取りで、七志は帰路に着く。

「ライアス殿に伝えてくれ、わたしも兄も、貴方の師事を仰ぐ心持
ちで今回の任に就く、と。」

それはすなわち、全軍の作戦立案をライアスに委ねるという意味
であった。

フィオーネは国軍を率いる将軍三名の一人、さうに兄の国王アレ
イスターもライアスの指揮に従い、口を挟まぬという明確な意思表示
をしたことになる。

迷惑を掛けないよう立ち居振る舞つたつもりでも、回避しきれ
ない迷惑な事態は向こうから覆いかぶさつてくる。最後に押し付け
られた羊皮紙の巻物を手に、七志はため息を吐いた。

城下町はにわかに沸き起こつた戦争景気で賑やかだ。ゴブリンの
討伐、今回はある低級クエストのそれではない、もはや戦争と
いう認識を人々は持つてゐるらしかった。

宿を出る時の打ち合わせ通りに乗合馬車を利用して、投宿してい
るカナリア亭へと戻る七志。

交通の便は整備されており、要所要所にはこのよつた交通網が敷
かれていた。

「おかいり、七志！」

心配したのだろう、リリイが馬車の停留所にまで出迎えに来てい
た。魔法治療の甲斐あって、日常生活に支障はない程度には回復し
ているのだが、遠出はまずいはずだ。

「リリイ、安静にしてないでいいのか？ こんな所まで出てきて…

…、「

「これくらい平氣よお、退屈してるくらいなんだから。それより、どうだつた？ なんか浮かない顔してるけどさあ、」

「うん、ちょっとな。」

拙い事になつた、と事情を話しながら七志は歩き出す。

皆が待つてゐるであらう宿。カナリア亭。

ライアスにはなんと言えばいいだろつか、師匠になつてもらつたばかりに迷惑を掛けてしまった。

「どうか。国王がそう言つてきたか。」

事情を聞いての、ライアスの第一声。

ダイニングに全員が集まり、作戦会議となつた。

しばらく宿を留守にしていた宿の亭主と娘のナリアも、七志が出てと行き違いで帰つてきていた。

初めて見る亭主は見事なスキンヘッド、つるりと光るハゲ頭が眩しい。娘のナリアはまだ子供で、七志には小学生くらいに見えた。

「ナリア、大人の邪魔をしちゃいけませんからね、向こうへ行つておいで。」

「はーい、ママ。ミントちゃんトコに遊びに行つてくるね、」

ばいばい、となぜか七志に手を振つた。

昔から子供にはよく懐かれたものだ、条件反射でばいばい、と返すとジャックがにたりと笑う。

なんだか恥ずかしくなり、そっぽを向いておいた。

事情を説明した七志に師匠のライアスが頷く。

「まあ、賢明な策だのう。なにせ、斥候に出て戻つてきたのは全員この宿の者だ、ここで作戦立案の下書きを描くのが妥当といつものだろう。」

だが、と言い置いてライアスは七志を見た。

「すまんが七志、何度か王宮と宿とを行き来してもうつ事になるぞ。全てをこひらで勝手に進めて本番で支障を来たす、国王や諸侯

の意見を入れつつ進めるのがもつとも安全だろう。土壇場で統率が乱れるのが一番拙いからな。」

王侯貴族はプライドの塊だ、王宮へ向かう前にもその点を言い含められた事を七志は思い出した。

七志が手渡した羊皮紙の巻き束を解いて、ライアスがテーブルに広げる。

羊皮紙には、タイラルマウンテンの詳細図と展開予定の軍、部隊の人数と指揮者の名が書かれていた。

先頭に位置する部隊は50名、指揮者の名は七志。

「これは……、」

覗き込んだジャックが思わず息を呑んだ。

「ふむ、従者一名といつのはつまり、わしとジャック、お前さんの事だらうな。」

顔色を変えることなく、ライアスがぼそりと呟く。

「ちつ、」続けてジャックが舌を打った。

「七志が率いるのは正規軍からの騎士50名か、言ひこと聞くのか？」「この連中。」

半分ボヤきに変わつたジャックが呟く。指を差す先に七志の名を示す文字。

「正規軍は3000名、予備兵力に傭兵部隊が後方に5つか。本陣に国王と姫将軍、親衛隊100名、……そうやうたる陣営だな。」

フィオーネの名は、戦好きの性質が大衆には知られており、陰での渾名は妖姫だ。王宮でじつとしているくらいなら物見の塔から飛び降りる、と豪語したと伝わっている。

「城の警護を除いて常備軍を全軍投入といつてこらだな。お前さん達から聞いたあの山の様子から言えば、これでもギリギリという感じではあるが。」

地形を示す等高線を読みながら、ライアスは言つ。

「この陣取りは拙いのう。本陣が囮まれてしまつ危険がある。
すまんがリリイ、大至急でトレイスを5枚ほど用意してもらえん
か。」

「わかつた、今夜中にはなんとかする。七志、来て。」

自身の名が呼ばれたことで、だいたいの予測は付いた。リリイは
安静が必要な身だ、図面トレイスの方法を七志に伝授したら休むつ
もりなのだろう。

まあ、妥当なところだと七志も思つ。それに、薪割りでも水汲み
でも、新しい技術を教わることは嫌いではなかつた。だが、それを
ライアスが止める。

「いや、七志には大事な要件がある。すまんがジャックを使つてくれ。」

「ん？　じゃあ、本格的な会議は明日かい？　俺はどうしても構わ
んが。」

「すまんな、」
七志を中心にして、しかし七志は見事に無視して事態は進行していく。

「七志には先ほど、城からの使者が荷物を置いて行つた。拝領品だ
ろうが、まずは荷を改めておく必要があつてな、勝手ながらわしが
先に開けさせてもらつたぞ。」

防具一式と衣装、他に武器の類はお前に直接下されたそつだな、
七志。」

「あ、はい。部屋に置いてあります、取つてきましょうか、」
「では裏庭で待つておる、急いで支度を整えて来るようにな。……
色々、チェックしたい事柄もあるから、拝領品はすべて身につけて
来るようにな。」

「くくりと頷いて、七志はダイニングを離れた。

「今の七志では、火の山の魔女と渡り合つだけの力はない。これも

試練というべきか。」

ライアスの言葉は謎かけのように、場の浮足立つた空気を押し潰し、殺す。

「……火の山の魔女、その配下の魔王一人。」

「いや、あの魔女は魔王クラスの魔物すら作り出す能力者だというだけの話で、一人倒せば辺り着くつてモンじゃない。」

リリイの言葉を受けて、ジャックが反論を返した。

重いため息を吐くリリイの唇が、また言葉を紡いだ。
「山のように魔物を作つて、迷宮の奥に閉じこもつてゐる、来訪者のなれの果て……よね。」

来訪者に来訪者をぶつけて潰しあわせる、タチの悪い解決法だ。

七志が裏庭に出ると、そろそろ馬鹿匠のライアスが待ち構つけていた。

しきしきとすすり泣く仕草で、ボヤいている。

「遅いのう、遅いのう、」

「すっ、すいません！この服、どうやって着るのか解からなくて戸惑つてしまつて……！」

慌てた七志が駆け寄つていった。

七志に下賜された防具は、見習い騎士の正装に近いものだとライアスが教える。

仕立ては上品で品質も良い。さすがは王宮の下賜品といづばかりで、一式を装備した七志は貴族の子弟のようだつた。胸当てと籠手の皮部分には彩色が施され、美術品の趣きすらある。

綿のシャツに丈の短い上着、その上から鞣した皮の胸当てとショルダーを装着している。左手のみに籠手を付け、バックルは盾の役目が期待出来るようにと鋼鉄製だ。

重い盾を持つ腕力のない七志の防御を上げようとするなら、やはりこゝなるしかない。

「ふむ、まあまあ合格点といつといふか。」

ライアスはそう言つて、小さな金具を取り出した。

腰のベルトに引っ掛け、武器を仕舞うためのホルダーをぶらさげる。裏返した毛皮の袋となめし皮が合わせになつていた。

「モーニング・スターはむしろ装着が面倒なのだ、この棘がおのれの足の肉を削る。」

すぽん、と収まつた棘付きマラカスは、ホルダー内の長い毛足がクッショーンとなり、上から叩いても感じないほど、棘の感覚はなくなつていた。

さらにライアスはその一本の柄を、鎖で繋ぐ。先端に輪になつた金具が付いていた。

「これでこの武器本来の姿に戻つた。」

かなりの長さの鎖が、足元にまで垂れてじやらじやらと音を立てる。

手繰り寄せてホルダーに仕舞つと、七志は師匠に質問した。

「先生、この武器の使い方を教えてください。」

「うむ。まずは七志よ、剣には型といつものがあるのは、もう知っているな？」

叩いても切れはせんから、それは当然のことだ。だが、この武器に正しい型などというものはない、叩いても投げても殺傷力を發揮するのだから、それこそ遣い手次第という武器だ。

差し出されたライアスの手の平に、七志は言われずと皿身の武器を預ける。

「見ておれ、」

七志を残し、数歩先へと進んだライアスが武器を構える。これが普通に長剣などであれば、絵になるような恰好良さがあるのである。しかし、どこか愛嬌のある見てくれをした武器だから、その姿はなんとも云えず滑稽だ。

「左手に持つ方、鎖は適度に巻いてこちらの柄と共に掴んでおれ。掴み方はこのように、親指と人差し指で柄を支え、残る三本の指を離せば鎖が放たれるように纏める。

そして、投げたら即座に鎖を掴めるように修練するのだ、これにて武器操ることが出来る。」

試技が始まった。

ライアスの手の中で、二つの棘マラカスが躍る。シャドウボクシングと同じように、透明な敵が棘に打たれ、殴られ、繰り出す斬撃を止められる。

剣を棘の間に挟み、残る一方を叩きつけてへし折った。

間髪入れず、投げる。

投げられた棘ボールはそのまま現実の木の幹を抉り、上空を舞い、また別の木の枝を叩き折る。

繰り手ひとつでやつてのけ、地に落ちた武器を、鎖を手繕つて手元へ戻した。

「……とまあ、いつこう具合に使うのだ。」

「色々無理っぽいです、先生。」

七志がこの域に達しようと思えば、どれほどの修練を積まねばならないか。

あと数日でこれをせよ、とこいつのは、ビリ考へても不可能だと思われた。

「今回のクエストは、戦い方よりもむしろ戦術がものを云う。

お前が直接、敵を倒すよりは、配下の者がいかに動くかを考えて、戦況を観察することを心掛けよ。

お前がするべきは戦いそのものではなく、進路を考えることだ。常に自軍が有利に動ける地形を確保し、敵に譲らぬように先手を打つ。

「それは先生にお任せしたいです。俺は、先生を護りますから。」

七志の言葉を聞き、ライアスがにっこりと笑った。

「弟子というものは、常に師の考えをトレースしておるものだ。わしがどのような作戦を立て、どう動くか。これはもう戦争といってよい、初陣でそこまでは望まぬが、せめて戦場の地形くらいは暗記しておけよ。」

武器が巧く使えるだけでは勝利出来ない、戦術だけでは生き残れない。

七志は深々と頭を下げ、師の言葉を噛み締めた。

「わあ、七志、すごいカッコいい……！」

裏庭から戻つた七志を見て、リリイが頬を染めてそう言った。夕暮れまで、納得がいくまでマラカスを振り回していた七志だが、風呂焚きの仕事を思い出して慌てて戻ってきたところだった。

「なんだよ、じろじろ見るなよ、照れるだろ。」

自然に七志もニヤケた顔になつてしまつ。衣装を出した時点で、格好の良さに惚れ込んでいた装備だ。

褒められて悪い気はしなかつた。

「あ、あのさ、七志。」

改まった口調でリリイが話題を変えた。

もじもじと身をくねさせるのは、彼女が照れ隠しをする時の癖のよつなもので、七志がここにカナリア亭に身を寄せるようになつてから先、何度か見ている。

大抵、この仕草の先に居る人間は決まっていて、たぶん、そういう事なのだろうな、と七志は思つてゐる。

もじもじと、視線も合わせないまま彼女は言葉を続けた。

「あたしは今回、留守番決定だからさ、その……こんなの、ヘンだつて思うかも知れないんだけど。

あのつ、……ジャックのこと……、助けてあげてほしいんだ。」「読みが当たつていて、楽しい半面で少し悲しい。

勘違いしていた時期が無かつたわけでもなし、好意を持った女が他の男を好いていると知つて、感じるところがないほど鈍くはない。じんわりとした痛みは、耐えられないほどではなく、けれど無視出来る程度というわけでもない。

失恋というほどでもない。平然と受け止めるのさすがに無理そうだけれど。

「任せとけよ。アイツ、結構、独りで行つちまつと『あいつだけど、ちやんと見張つとくから。』

務めて普段通りに裝つて、七志は無理やりの笑顔を貼りつけてみせた。

お馬さんが好きです。けど、ロバさんはもつと好きですー。

風呂焚きを終えてダイニングへ戻った七志を、今度は件のジャックが出迎えた。

「よお、リリイと何を話し込んでたんだ?」

「ヤーヤと勘違いな笑みを浮かべるにやけ面をぶん殴つてやりたい衝動に駆られつつ、七志は答えた。

「鈍感男の凹ませ方についてだよ。」

大して興味があつたわけでもないのだりう、その返答を聞いたジャックの反応は薄い。

さつさと話題を変えた。

「まつ、そんな事より今はこっちが大事だ。コレ、見たことあるか?」

そう言つて取り出したのは、『』のような銃器のよつな、奇妙な道具だった。

怪訝そうな顔をしている七志に、ジャックがそれを押し付けるようにはめさせる。

「クロスボウだ。」

「ああ!」

名前だけは知っている。

見たのは初めてだ、細長い、弁当の箸箱のような形状の箱に、子供の玩具のような小物『』が付いている。箸箱は七志の腕ほどの大きさではあるが。

同じものをもう一つ、ジャックは取り出した。テーブルの下に用意して待っていたらしい。

「こいつは足で装填するんだ。弦を引く時に、腕の力じゃなく、体重を掛けてな。そんだけ強力だつて事だ。弓つてのは、しなる力がバネになつて矢を撃ち出すわけだからな、そのバネが強力なほど殺

傷力は高くなる。」

言いながら、ジャックは実際にクロスボウの矢を装填してみせた。構えながら、さらに続ける。

「簡単な鎧程度なら、ブチ抜いてしまつ。殺傷力は弓の比じゃない。」

「すげえ、」

興奮気味に、七志も自身に『えられた武器を眺めた。

「ただし、弱点もある。装填時に大きな隙が生まれるんでな、ソロでの戦いには向かない。だが、今回のような戦争での集団戦には威力を発揮するはずだ。」

コイツは弓に比べて小型だから、取り回しも良い。制限の多い山間での戦いには圧倒的に有利だ。」

まあ、その分、値は張るんだけどな。ヒジャックは言つて、一呼吸置いた。

「コイツを、国王軍に売り込んでもらいたいんだ。」

本題を聞かせる。

真剣な顔つきに、七志にも緊張が伝わった。

「ひとつも命が掛かってるからな、出し惜しんでる場合じゃないって事だ。」

勝率は出来る限りは上げておいて損はない。今も知り合いで声を掛けちやあ集めて回つてるが、国王が街の鍛冶屋連中に命令を掛けりや、期限内で全軍に必要な数は揃うはずだ。

説得してほしいんだ。お前にかかる、頼むぜ、七志。」

来訪者である七志の知るところではないが、現状、弓とクロスボウは同じくらいの比率で普及していた。

双方に利点と弱点があり、好みやコストパフォーマンスに合わせて使い分けられている。

国軍では弓の方が配備率は高い。やはり、値段の問題もあり、お

いそれとは変更出来ないものだった。

「俺たち傭兵部隊の位置付けは予備兵だ、だから、俺たちが勝手に装備を整えて挑んだとしても、サイアク、現場で取り上げられちまうだろう。

全軍に配備、それしか俺たちが大手を振つて装備出来る道はない。お前が説得して、正規兵たちにも装備させるんだ、七志。」
こくりと頷いて七志は引き受ける。責任重大だが、断るわけにはいかないと判断した。

「わかつた、掛け合つてみる。

俺やジャックの言葉つていうんじゃ説得出来ないだろ?けど、先生がそう言つてたつて言えば、国王兄妹にはイチコロだろ?と思つ。」

「あの一人の心酔振りは半端なかつたからな、と括つた。

「そういう事なら、わしが一筆書いてやる!」

ダイニングの戸口から声が掛けられた。

「先生!」

「じいさん、来てたのか、」

振り返つた先、入り口付近にライアスが立つていて、二人の様子を眺めていた。

話に熱が入つて、近付いていた足音に気づかなかつた、とジャックが答える。

「七志、書簡が書き終えるまでに食事を済ませておけ。早馬で王宮へ届けてもらうからな。」

「は、はい、先生。」

すでにリリイが炊事場に立つていた。七志のためにトレイに食事を揃え、さつと出してくる。

七志は内面の緊張を隠して、急いで食事を済ませた。……馬に乗れるだろうか。

「ジャック、俺、馬に乗ったことがないんだけど……、」

口の中の肉をぐくりと飲み込んだ後に、七志は切り出した。

「ああ、そうか。俺は職人の手配やらで忙しいし、リリィはさすがに動かせないし……、

仕方ない、ナリア嬢ちゃんに頼むか。」

ナリア、と聞いて七志が首を捻る。「この宿の冒険者はリリィとジャックと……昼間の会話を思い出す。

「ばいばい、と手を振った女児。

「あの子！？　てか、あんな小さい子でも馬に乗るの！？」

驚きはひとしおだ。

「そうね、小さい子でも馬には乗るわね。てか、必需品だし。」

「お前も練習しておかなきやな。まあ、当たり前って感じだからさ。

「リリィとジャックが一人して、なんとも言えない顔をしてトドメを刺した。

「ここは異世界なのだ。

七志の居た世界の過去、中世ヨーロッパにおいてはどうだったか、それは七志も調べたわけではないから知つてはいない。けれど、常識で考えて、年端もない少女が乗馬を嗜むのが当然などといふ感覚は普通だなどとは思えなかつた。

だが、ここではそれが普通なのだ。

普通に怪我は魔法で治癒し、冒険者という職業があり、魔物が跋扈する。

「……馬に乗れないのって……恥ずかしい？」

七志が恐る恐るで訊ねたセリフに、ジャックとリリィと師匠のラилас、三人が揃つて頷いた。

「じゃあねえ、お兄ちゃん。教えてあげるから、よおく聞いてね。

「うん、ごめんね、お手柔らかにな。」

トホホな気分で七志は幼女に手ほどきを受ける。王宮に出入りが許されるのは、冒険者の中でも、現状で七志ただ一人だ。当然、今回の中の使者にも七志が立つことになる。

つまり、馬に乗れない七志は、幼女の背に掴まつて乗せてもらうことになる。

お姉さん気分に浸つているナリアは得意満面だ。厩から引き出しきた一頭のロバを前に、七志に説明を始めた。

「これは、ロバさんです。

初めての時は、ロバさんから始めます。いきなりお馬さんは、無理だからです。お馬さんは大きいので、怪我をしないように、最初はロバさんから始めます。いいですか？」

「はい、いいです。て、ナリアちゃん、ごめん。俺、今日はそんな時間ないんだけど。」

気が急いでいる七志が、やんわりとナリアに抗議した。

急いで王宮へ向かい、書簡を渡してこなければならないのに。「黙つて聞いてください！……ロバさんを馬鹿にしてはいけません。思いつきり走つたら、お馬さんの方が早いけども、そうでもない時は、ロバさんとお馬さんの速さはあんまり変わりません。」それから、とナリア。

「わたしは、まだお馬さんに乗つて走るのはへタクソです。」

「一人を乗せての乗馬には自信がない、それがロバを選んだ最大の理由だった。

ロバは一人を乗せてテクテクと急ぐ。

大の男が幼い少女に乗せてもらつている奇妙な図。
道行く人がみな、微妙な顔をして見送つているような気がして、七志は目を瞑つていた。

なんでこんな目に逢うんだろう、と。

熊わざの書簡」と「お嬢さん、お逃げなれ」、

王宮に辿り着くと、まずは門番との掛け合い漫才が始まる。

「……で、あるからして。なぜここを通りたいのか申せ。」

「だから、重要な書簡を預かっているので、王様にお目通りを願いたいんですつて。」

「うむ。あい解かった。で、貴様は何者か。」

「俺はカナリア亭という宿に寄宿している冒険者で、七志と言います。……で、さつきも言いましたよね！？」

「そうであったか？ で、王宮へは何用で参るのか。」

「……、」

落ち着け、ここで癪癩を起したら駄目だ、我慢だ、我慢。
深呼吸と共に、じっくりと数字を10ほど数えて、七志は繰り返した。

「重要な書簡を預かっているので、王様にお取次ぎ願います。」

「つむ。あい解かった。で、貴様は何者か。」

駄目だ、これは。七志は内心で頭を抱えた。

押し問答が続く間に、何人かの訪問客が、七志とは違つて呼び止められもせずにすんなりと城門を通りしていく。それはいずれも立派な馬車で、王宮は民に開かれている、と見せかけて、その実はこんな具合に訪問者を制限していた。

民衆は月に一度か二度、国王諸侯に暇が出来た時にだけ、ある程度の数で謁見が許されるだけだ。

また一台、立派な馬車が問答をしている七志の横を通り、今度は門の前、七志の傍で止まつた。

「これ、門番、開けて差し上げよ。その方は来訪者、末には勇者となつこの國を救うお方ぞ。」

無礼を働くでない。」

馬車の中から声がかかった。

「！」これは司祭様。ご到着は明日と伺つておりましたが？」

「予定が繰り上がったのだ、本日、フィオーネ様はいらっしゃるだ
ら？ いつも留守であられるが。」

小さな採光窓のカーテンが上がり、ぎょろりと人の目がこちらを
向いた。

「道を開けよ、我らと共に、勇者さまもお通しするのだ。」

「ははっ、」

開け放たれた城門で、七志の行く手を塞いでいた肉の門が、この
一言でさつと開いた。

問答をしていた門番が横へどいだ。

「さあ、来訪者殿。奥へ進まれよ。まっすぐに行けば、王の控えお
られる謁見の間ですぞ。」

目だけの人物は、そう言つて、ふたたびカーテンを閉ざした。
御者が鞭を入れ、馬車馬がいななき、車輪が回り出す。ガラガラ
と堀に掛かる城門の橋げたを渡つていった。

一步を踏み出し、七志は門番を振り返る。

「あれって、誰ですか？」

「あれは司祭さまだ。明日、という話だったのに……フィオーネ様
への縁談話をなんとしてでも進めたいらしい、小僧、すまんがフィ
オーネ様に事の次第を伝えてもらえんか。」

今の今まで意地の悪い仕打ちをしていた事も忘れたかのように、
門番は七志に手を合わせた。

「馬車を降りて支度を整えるまでには間がある、フィオーネ様は兵
舎におられるから、急いで知らせれば逃げ出すにも十分な時間が取
れる。」

お役に立てば、国王様の覚えも田出度くなつから、損にはなら
んぞ。」

急げ、急げ、と急かされて、訳も分からず七志は奥へ進んで、そのまま兵舎へと向かつた。

以前来た時に案内されていたから、人に聞くまでもなく、兵舎へと辿り着き、探す人物を見つける。

預かつてきた書簡は、国王かその妹の姫将軍に渡せば、目的は果たされるのだから、これはむしろ渡りに船といったところか。

「フィオーネ将軍、」

「おお、七志ではないか、どうした？」

書簡が先か、司祭が先か、一瞬だけ迷った後に司祭の件を話す。

逃げるというなら、一緒に付いて回ればいいことだ、と。

「ふむ、司祭がまた来たのか。しつこい事よ、その上、わたしを出し抜こうなどと……賢しいな。」

トゲのある言い回しで、フィオーネは嫌悪を示した。

「付いてこい、七志。秘かに城を抜ける。」

やつぱりね、と七志は一人納得し、駆けだしたフィオーネの後を追う。

書簡は出来れば国王に渡したいところだが、実質の軍務ならこのフィオーネでも問題はないだろう、なにより、ここで否を唱えれば、このお姫様のことだから、どんなイチャモンを吹つかれられるかも解からなかつた。

兵舎の敷地を抜け、練兵場を横切つて囲いを抜けると、森に入る。フィオーネは慣れているようで、さっさと森の中を進んでいった。「あ奴は好きになれん。どうして隣国との縁談を纏めようとするのか、さつぱり理解に苦しむ。」

森の中には小川が流れ、花が咲き乱れ、元々のどかだと思つていたこの国の景色の中でも、殊更に平和で牧歌じみた光景だと思わせる。

その景色の中を主従のように連れ添つて歩きながら、七志は前を

行くフイオーネの言葉を聞いていた。

「隣国の王子。見たことはあるまいが、どうしようもないブ男だ。普段から兄上を見慣れているわたしにとって、あんな男を婿にするなどまさしく地獄。

兄上と並べると見劣りするなどといつレベルではない、天と地ほども差が開く。そんな男と夜には褥を共にするのだぞ、……ぞつ、とする。」

熊のよつこずんぐりとした大男、熊に劣らぬ体毛がシャツの胸元からもじゅもじゅと、その上剃り跡が青くなるからと伸ばした髪が顔中を埋めている、と、姫の好みに合わぬらしい隣国の王子はヒドい言われようだった。

「それに比べて兄上は……、」

「姫将軍はブラコンなんだ。」

つい、口が滑った。

凄まじい勢いで睨まれた。

「だつ、黙れ……、わ、わたしが兄上に、だと、そ、そのような、いや、兄上は尊敬に値するではないか、きさま、何を言い出すかと思えば、そのような、！」

真つ赤になつて言い訳を探すフイオーネが、やけに可愛く見えた。「あ、いや、ごめん。気に障つた？ なんか、そうなのかなつて思つただけで……、」

フォローしようと言葉を継いだ七志だが、ますます姫君の羞恥に火を付けてしまつたらしい。

髪を振り乱してフイオーネは否定する。

「ち、ちがう！ いや、違う！ あの男が熊のよつだから！ 兄上と似ていたら少しくらいは、いや、違う！」

「落ち着いて、」

「だまれ、だまれ！ 兄上は最高の兄上なのだから、当然だ――！」

しまいには喚きだし、七志を放置して走り去つていった。

「えー？ ちよつと、待つて！ こんなトコに置いていくのかよ！

？」

慌てて七志も後を追つただが、フイオーネの足の速さは尋常ではない。

そんな鎧着込んでその速度とか、絶対チートだらー！ 眺る見る遠ざかる後ろ姿に七志が心の中で叫んでいた。

「ちきしょー！ 余計なこと言わずに手紙渡しちゃよかつた！…」

ここまで来て迷子。

森の木々の向こうに城の威容がそびえているのが垣間見えた。

目が一つで鼻が一つ。

チート。姫将軍のあの脚力はきっとチートで間違いない。うん。チート・ツールは数々あれど、大抵は『使つたら負け』という意味でプレイヤーの間には広まっていた。

はずだ。うん。

チートとは、自力ではゲームがクリア出来ないようなヘタクソが、機械を頼つてやつとこさクリアするようなプレイ方法を言うのだから。チーターというのは、そんなズルが染みついたプレイヤーに対して、むしろ憐憫を込めて呼ぶ蔑称という色合いの方が強いのだ。それが転じて、まるで機械仕掛けのようにすら見える凄腕のプレイヤーに対しても使われるようになつたわけで、正しくは『チート』を使つてるんじゃないかと見紛うほどの腕前』という事で、前提でチートは使われていない事が必須条件になる。

そうなんだ、チートみたい、といふのとチートってのは反転した関係なんだ。

ブツブツと眩きが地に落ちる。

そんなあれやこれやを考えながら、七志は森の中を一人とぼとぼと歩いていた。

プレイ途中のあのゲームはどうなつただろう、だとか、図書館で借りた本は借りっぱなしになつてしまつたな、だとか、そんな取り留めもない事柄が脳裏を巡る。

時間が急いでいるからと早馬で……いや、早口バで城まで来たといつのに、これでは乗合馬車を使った場合となにも変わらないじゃないか、と、むくむくと怒りが沸いてくる。己の迂闊を。一刻を争うという大事な場面で、大失態だ。

「あー！ もう、死んじまい、俺！」

うずくまつて頭を抱えた七志の耳に、ワンテンポ遅れて足音が聞

こえた。

ピタリ、と止まる音の主。

「……俺の後を付けてんのは誰だ？ 今、ものすゞく虫の居所が悪いんだけど、俺。」

座り込んだままの姿勢で、静かに七志が告げた。

「『ごめんなさい、あの、迷子になつちやつたんじやないかなー』って思つて……。」

振り向いて視線を投げた先に、女の子が立つていた。

レースのかショールなのか、細かい刺繡の施された薄い布を頭に被せている少女。歳は七志と同年代くらいか。ゲームや漫画でいうなら、彼女の職業は巫女とか神官とかじゃないだろうか。そんな服装。

「……誰？」

露骨に怪訝そうな顔を作つて、七志は短くそう質問した。

多分にまだ拗ねがあつて、いわばハツ当たりだ。

「わ、わたしの名前はキッカ。占い師をやつてるの。わたし、あなたのファンなの。

ずーっとあなたの活躍を見てたのよ、ほら、この水晶玉で……、少女は慌てた様子で手提げ袋から大きな茶色い球を出して、七志の前にかざす。

虎瑪瑙とかいう石だ、茶色い縞目が動物の瞳を思わせる。両手で支えるほどの大ささは珍しげが。

「タイラルマウンテンでゴブリンをやつつけたり、カトブレバスを倒したり……。ぜんぶ、見てたの。

わたし、来訪者が来たらこの水晶に映して、街の人にお知らせしているの。だから、あなたが来た時からずーっと、あなたの事を見てたのよ。」

憧れていたアイドルに出会った女子高生のよつこ、キッカは頬を上気させてうつとりと息を吐き出した。

「すういわ、こんな間近で見られるなんて。」こんな風にお話し出来るなんて思わなかつた！」

「そ、そうかな……？」

一人で盛り上がつている少女に、七志はなんとも居心地が悪い。そんな風に自慢できるような活躍だとは思つていなかつたらだ。

話に聞いた、チートな能力を貰つていたという他の来訪者たちならいざ知らず、自分など通訳の力などという口クに使い道もない能力持ちなのだ、どう考えたつてこの少女に絶賛される謂れはないと思えた。

「あつ、あのつ、この森は慣れない人だと、けつこつ迷つてしまつの。

そういう風に作られている人工の森なの。だから、わたしが案内するわ、付いてきて。」

「そうなの？ ジやあ、よろしくお願ひします、」

すんなりと見知らぬ少女を信用して、七志はその後ろについて行く。

平和が当たり前という世界に生まれると、世界の違いに慣れるのはなかなか大変なのだ。

「足元に気をつけて。この森はあちこちアトラップだらけだから。キッカガ鋭く声をかけた。

突然現れた地の裂け目のような深い溝。寸で堪えて七志が止まる。「狭いよづに見えるけど、中は広くて袋状になつてゐるよ。落ちたら這い上がれないの。」

覗き込むと、底のほうはビのへりこあるのか、闇が広がつているばかりで見当もつかなかつた。

穴はネズミ返しのように壁がせり上がつていて、落ちた者が登れないように工夫がなされている。

「でも、七志の武器は鎖が付いているから、わりと落ちても平氣かも知れないね。」

師匠のライアスに感謝だ、そのような使い道など思いつきもしなかつたけれど。

森の、数々のトラップを教わり、回避しながら七志は城へと近付いていた。

キッカは物知りで、道すがらに色々な事柄を七志に教えてくれた。「翼の神々というのは、正しくは、旅の守護神である翼の女神との眷属の神様たちのことね。

翼の女神は大空の神の七人の娘の一人で、もつとも美しい女神なの。だけど、鍛冶の神が攫つていって、無理やり自分の妻にしてしまつたっていう神話があつて、翼の女神と鍛冶の神は夫婦なのよ。」「へー、」

この世界で時々耳にした翼の神々について、道すがらで七志はキツカに質問をした。

翼の神々というものが、異空間へ飛ばされた者たちと何かの関連があるので聞いていたからだ。

「この世界へ時々飛ばされてくる来訪者は、女神に呼ばれてくるんだって話なの。

女神は、好きでもない神の妻にされたせいで性格がねじ曲がって、悪神になってしまったの。夫である鍛冶の神を困らせるために、来訪者たちに恐ろしい力を与えて、鍛冶の神が作った地上世界を破壊しようとしてるそうよ。」

翼の神々は悪神、という話もどこかで聞いた気がした。

「鍛冶の神はその後、どこかの国の王女を見始めたのだけど、その王女は女神の嫉妬で醜い化け物にされて、どこかの迷宮の奥底へ封じ込められてしまつたんですって。」

「嫌いな旦那が浮氣したからって、その浮氣相手まで憎いとはね…

…。」

七志が皮肉を込めて笑う。

「でも、無理やり連れて来たうえに、浮氣なんてされたら許せないよ。女のプライド、ズタズタだよ。」

「うん、そりゃそうか。」

逆にして考えて、七志は先の言葉を訂正した。

好きだと無理やり彼女になつた女が、他の男と浮氣したら……何とも言こようのない感情を抱くだらう、そう思つた。

「神話ってのは、じこの世界でもロードなんだなー。」

「そうだよね、きっと住んでる人間はみんな同じだからだと思つ。」

「目が一つで、鼻が一つで。」

「じこの世界でも同じなんだろ?」

「うん、たぶん、そうだろうな。」

キックの表現は面白いな、と七志は思つた。

お隣のお隣さんたち。

「あ、ほら、七志。見えてきたよ、あの吊り橋を渡れば、お城。」田を向けると、門番が立つている簡素な小屋と跳ね上げられた橋が見えた。

「やつたー、なんとか戻つてこれた！ ありがとうな、キッカのお蔭だ。」

「いいよ、お礼なんて……。わたしはお城へは入れないから、ここでお別れ。」

手を振るキッカにさらりと礼を言いながら、七志は先へと進んでいった。

「じゃあな、キッカ。また会えるといいな！」

「うん、またね！」

「……また、今度ね。」

遠く、七志の姿が消えたあとにも、キッカは呟いた。

両手に抱いていた虎目水晶が、ぎょろりと左右を見回す。

「マイナ様。あれが、今度やつてきた刺客でございましょうか。」

「そうだよ。次の来訪者、舞名七志。……わたしを殺しに来た、勇者。」

キッカの被る純白のベールが、暗い闇色に染まる。

吉家麻衣奈、七志と同じく、別世界の日本という国からの来訪者だった少女。

今は、火の山の魔女だ。

七志の能力は『通訳』。それゆえに、気付かなかつたのだ。日本語で会話をしていた事に。

誰か、この世界の人間が一人でも居れば、いや、七志の注意が足りていれば気付いていただろう。

なにせ、麻衣奈はこの世界の言葉がまったく理解出来ないのだから。

「麻衣奈の作り出す魔物はみな、日本語を話していた。」

「七志を護らなくちゃいけないの。皆、力を貸してあげてね。」

いつの間にか、彼女の背後には複数の人影が立っている。大小のその影には、人にはない角や翼が生えていた。

「あの者は自身の力がどれほど恵まれたものかも、気付いてはおらぬ様子。我らが影となつて助けたとして、こちらの思惑通りにその後も動いてくれるかどうか。」

「動いてもらわねば困る。マイナ様が元の世界へお戻りになる為には、あやつの能力は不可欠。……なに、用が済めば、その時に消えてもらうのだ。それまでは、生き永らえて貰わねば困る。」「ゴブリン」ときに、殺されでは、困る。」

「わたしはこの世界の言葉が解からない。そのせいで、とても酷い迫害を受けて、魔女にされてしまったわ。こんな世界にいつまでも居たくない、絶対に元の世界に戻るんだから……。」

放り出された場所が、何処だったのかも解からない。

いきなり暴漢に襲われ、『力』を使って危機を凌いだ。……それだけだった。

現われた魔物が自分の作り出したものだと気付かないまま、いつの間にか人々に追われ、逃げた。

あとはお決まりだ。他の、数多くの来訪者同様に、魔物になつたと決め付けられたのだ。

弁解さえ出来なかつた。言葉が通じないといふことは、そういう事なのだ。

この国の隣、隣国からさらに外れた砂漠の土地に、燃え盛る火の山を作り出し、砦を作り、籠城した。

砦の周囲に張り巡らせた幾重の迷宮。さらにその周囲には魔物の

国を作り出した。

魔王を作り出し、城を構えさせ、魔物の軍勢を『えた。

そうして、送られてくる刺客、次なる来訪者を待ち受けていた。すべては自身を守るためだ。人々は誤解しているが、彼女の能力は『設定を実現する力』だ。手にしたノートに書き込むだけで、その設定はこの世界の現実となる。

作るのは、なにも魔物ばかりではない。

ただし、物質化と創造とに限られた。ゼロからの創造だけであり、変更は利かない。元々存在する他者に対する干渉は出来ない。攻略方法があるとするなら、そこを突くしかない。

「七志を護つてあげて。どうしても、彼の能力が必要なの。解読出来るのは、彼だけなの。」

ミノタウロスのような、しかし、手にはお馴染みの斧ではなく、なぜかエキスパンダーを握りしめた魔物が進み出た。

「マイナ様、あやつを護るのは、それだけが理由では御座いますまい。」

「ち、違つもんつ、碑文を読めるのは七志だけだからだもんつ、別に何もないもんつ、」

麻衣奈の顔が火を噴いた。

「お顔が真っ赤で御座います、いっそ聾啞のフリをなさればずーっと一緒に居られましたものを。」

背後から鷺の頭をした男が囁いた。その首には磁気ネックレスがキラリと光る。

「そのつもりだつたけど、目の前にしたら喋りたくなつちゃつたんだもんつ、」

麻衣奈の両手が、抱いていた田玉の魔物をぐりぐりと捏ね回した。

「痛いですぞ、マイナ様！ お止めください！」

もうあの小僧めを映して差し上げませんぞ！ と、魔物が喚く。

「そっ、それはダメッ！」

麻衣奈も負けじと大声を上げる。

「その玉玉を使って、ずーっとあの小僧を眺めておられた。」

「そうだ、そうだ、ずーっとヒーヤーヤしておられて気持ち悪かった。」

「うへ、うむやこのですっ！ 七志はわたしのツボにび嵌りだつただけですっ！」

ヒーローはやつぱり泥まみれで必死な方がカツコインんですっ！ カトブレバス戦はみんなで盛り上がったじゃないですかっ！」

つべこべ言わずに守りなさいーつ、麻衣奈の喚き声が静寂の森に響いた。

一方の七志は。

自分が思わず相手にモテモテだなどとは露ほども知らず、なんとか辿り着いた王宮前で、またしても押し問答に囚われていた。

「だから！ 王様に！ 会わせてくれつづってんだろが！！」

「だから！ 何故かと！ 問うているだろが！！」

正門へ回れい、怪しい奴め！ 門番は吊り橋を下してはくれなかつた。

可愛い子猫もらってください。

「……ときには、大臣。あれはなんだ？」

富殿の廊下を渡っていた国王アレイスターが、突然に歩みを止めてそう言った。

視線の先には王宮の城壁にしがみつく人間。

「あれは、先日、謁見に訪れましたる来訪者で御座いますな、名は確か、七志と。」

「ふむ。……弓と火矢を持て。」

火種は要らぬ、と従者に命じて、アレイスターは侵入者の動向を観察した。

「ぐーそー！ 降りれねーーー！ 誰かーー！ 誰か、助けてくれーー！」

あらん限りの声を振り絞つて、七志は取り付いた壁で叫び続けていた。

薦を調達し、堀の水を泳いで渡り、壁をよじ登つた、までは良かつた。

低そうに見えた城壁は、中が低い造りをしていて、壁を越えた者を容赦なく突き落すのだ。

登る時に使った薦は、降りる時には半分しか足りていなかつた。もちろん、城内の兵士たちに七志の声が届いていないわけはない。が、助ける義務を感じた者は一人も居なかつた。

突然に飛来する弓矢。

「あぶね！」

頭を引っ込めなければ的中していただろう。矢が飛んできた方向を見れば、国王が今までに超級の弓を引き絞つていてる。

「俺です、俺！　こないだ来た来訪者！」

必死に声を張り上げる七志に国王が気付いた風もなく、続けて第二派が襲ってきた。

射落とすつもりだ。

火の付いていない火矢は、矢の先端に鏃ではなく油を染ませた綿が巻いてある。それでも当たれば痛い。そして、落ちたならばさらに痛手を受けるだろう。

なにより、七志からはそれが鏃か綿かは判別出来ない。

「やめろーー！　俺だつてば！　忘れちまつたのかよ、脳筋国王！」

！

聞かれたら拙いというだけでは済まない罵りの言葉。

しかし声の届かない国王が七志を狙う手を止めることはなく、次の矢は引き絞られた。

薦を掴む両手に、激痛が一瞬だけ走る。それは十分に七志を落とすに足る痛みで、緩んだ掌から薦はするりと逃げ去った。落下。

「お見事で御座います、陛下！」

「うむ。しかし二度外した。精進せねばな。」

人でなしな会話が為されていた。

地面に激突する寸前で、七志は止まっていた。

宙に浮いたまま、段ボール箱の中身と対峙している。

段ボール箱にはヘタクソな字で『だれか、ひろってください』と書かれており、無理やり入つたらしいギチギチの身体を窮屈そうに縮めた何かが七志を見ていた。

ハロウインで見たようなカボチャを被っているが、横に見える羽は悪魔のような。

「……拾つてください。」

「断る。」

即答。落下。

強かに七志は腰を打つた。

「いてて……、」

「拾つてくださいよー、可哀そつな小動物がこんな哀れっぽく鳴いてるのに、見捨てるんですかー？」

「可哀そな小動物には見えないから見捨てる。てか、通報する。」

カボチャ頭が小さな羽を動かして、宙へ浮いた。

「命だつて助けたじやないですかー。あのまま落ちたら、絶対怪我してたでしょー？」

「そ、それは……。て、お前、なんなんだよ？ 見た目だけだと魔にしか見えないんだから、拾えとか無理！」

ずい、とカボチャが七志の顔に寄つた。カボチャの中身はカラのような気がしたが、言つのはなんだか気が引けた。からつぽ頭とはこのことか。いや、絶対、それタブーだろ、と。妙なところで気が回る小心者な七志だ。

「わたし? „ぐく“フツーの召喚獣ですよ。ジャック・オ・ランタン」と、申します。」

「……」

これをもし仮に使い魔にして、ジャックと呼んだら、向こうのジャックに殺されかねないな、そんな事を考へてゐるうちに、周囲が騒がしくなってきた。

「ああつ！ 人が来る、助けてください、兵士に見つかつたら問答無用ですよー、殺されるー！」

それには全面的に賛同できるな、と、七志はカボチャを両手で捕まえる。

「俺のだつて事にして誤魔化すから、調子合わせとけよ、」

「いえいえ、契約していくださればいいのですー、さあ、わたしの名

前を呼んで！」

「え、あ、」

「どじだ、こっちから声がするぞ、と鋭い兵士の呼びかけ。

焦った七志は、軽はずみな事をしでかした。師匠のライアスや宿の仲間たちに散々言われていたこと、平和ボケ、あるいは迂闊。

「ジャック・オ・ランターン？」

「発音が甘いですけど、まあいいです、装着…」

「ぎや！」

七志の頭がカボチャになつた。

「ば、化け物！ 衛兵、衛兵ーーー！」

「ち、ちが……！ なんてコトすんだ、てめー！ 離れる！」

七志を見た兵士は慌てて、応援を呼び集める。

瞬く間に、大勢の兵士に囲まれた。

「誤解だつつても、聞く耳持たずじゃねーか！ どうしてくれんだよー？」

「わたしを装備すれば、素晴らしいチート能力が発現するのです、ほら、ほら！」

周囲に散開する屈強な兵士たちが、一斉に七志に向かつて武器を繰り出す。それは一つも七志に掠らず、指先一つで束ねられ、纏めあげられ、地面に叩きつけられた。

「今あなたは無敵です！」

身を捻り、両腕を広げて回転すれば、その周囲に風が巻く。突風と空気の刃が、周囲の兵士を吹き飛ばした。

「無敵！ まわしく無敵！ ひやつはー！」

「……黙れ、くそ悪魔。」

肩で息をしながら、七志は前方を見つめ、低い声で言った。

怒りは頂点、しかし、それ以上に沸点超えていますと宣言している状態の国王が、七志に向かつてゆっくりと歩みを進めていた。

立ちのぼる鬪氣。笑みを浮かべる筋肉ダルマ。目がちっとも笑っていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9363x/>

ナナシとマイナと落日の鎧 【企画競作スレ】

2011年11月20日03時21分発行